

南あわじ市文化財調査報告書 第10集

# 南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅶ

2010年度 埋蔵文化財調査

2014年3月

南あわじ市教育委員会



井手田遺跡 3次調査 (上が南東)



井手田遺跡 3次調査 玉類



里丸山1・2号墳（南西より）



里丸山1号墳（南東より）

## はじめに

南あわじ市では、このたび平成22年度の埋蔵文化財調査の成果概要を『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』として刊行する運びとなりました。

南あわじ市の埋蔵文化財調査は、圃場整備事業に伴う調査が大半を占めています。県内でも有数の農業地帯でありながら、1年を通じて温暖な気候と肥沃な農地を有する好条件が災いして圃場整備を遅らせることとなり、平成23年度末の圃場整備率は約46%（兵庫県77%、淡路島41%）で、現在も圃場整備事業が盛んに行われています。

埋蔵文化財行政にとっては、まだまだ開発事業に伴う発掘調査中心の厳しい状況ではありますが、一方で発掘調査によって新たな歴史を紐解く発見や知見が増加し、色々な時代における当地の重要性が一層明らかになることは、誠に喜ばしいことです。

少子高齢化、過疎化が急速に進展している地方にあって、郷土愛を育むうえでも地域の歴史を後世に継承していくことが、今を生きる我々の重要な責務と認識しており、埋蔵文化財調査の必要性を実感しています。

今回刊行いたします年報は、井手田遺跡では玉類の出土、湊里地区での古墳発見、また限られた範囲でしたが兵庫県指定史跡である養宜館跡で初めて発掘調査を実施した多くの成果などを掲載しています。調査概要という十分な資料ではございませんが、今後もさらなる努力により地域史の解明と当市の文化財保護に努めていく所存ですので、ご支援賜りますようよろしくお願いします。

最後になりましたが、本書を作成するにあたり、ご指導ご協力いただいた方々に対し、厚くお礼申し上げます。

南あわじ市教育委員会

教育長 岡田昌史

## 例言

1. 本書は南あわじ市教育委員会が2010（平成22）年度に実施した、埋蔵文化財調査の記録である。
2. 調査は南あわじ市埋蔵文化財調査事務所の山崎裕司・坂口弘貢・定松佳重・的崎薫が担当した。
3. 出土遺物の整理作業は、赤井友美・宇治田力・垣脇美奈子・白川裕二・富岡美早子・豊田亜希子・濱本善美・榎本早苗・松下矩之・三宅靖子が行った。
4. 本書の編集は山崎が行った。執筆・レイアウトについては文末に記している。調査担当者については、調査一覧に記す。
5. 各遺跡の発掘調査および本書作成にあたっては、下記の方のご協力とご指導をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する。（敬称略）

浦上雅史・森岡秀人・中村弘

# 目 次

巻頭写真図版

はじめに

例 言

第1章 埋蔵文化財事業の動向 ..... 1

第2章 埋蔵文化財調査の成果

第1節 埋蔵文化財調査一覧表および調査位置図 ..... 2

第2節 主な埋蔵文化財調査の成果

1 井手田遺跡（3次調査） ..... 3

2 養宜館跡（2次調査）・戒壇寺跡（1次調査） ..... 14

3 里原田遺跡（2次調査） ..... 19

4 里丸山1・2号墳 ..... 22

第3章 資料紹介

鎧崎古墳群出土遺物 ..... 25

# 第1章 埋蔵文化財事業の動向

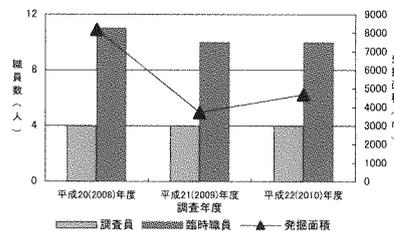
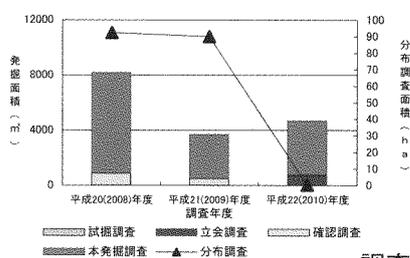
平成22年度は分布調査1件、確認調査1件、立会調査1件、本発掘調査3件を実施した。分布3,540㎡、確認10㎡、立会746.5㎡、本発掘3,933.5㎡、分布を除く調査面積合計が4,690.0㎡となり、発掘調査面積は前年度より微増しているもののピーク時の平成18年度（13,390.7㎡）に比べるとやや減少傾向にある。

発掘調査は、前年度からの継続事業である経営体育成基盤整備事業の阿万本庄地区と湊里地区、新規の事業である特定環境保全公共下水道事業（八木榎列7号線管渠布設工事）と市営住宅建設事業（福良丙地区）を行った。

調査成果で特筆すべきものとしては、阿万本庄地区（井手田遺跡）では弥生時代の方形周溝墓群を検出し、古墳時代前期の玉類が当時の水辺付近と思われる場所から出土した。湊里地区ではこれまで未確認であったが、里丸山1・2号墳が発見され、その存在が明らかとなった。石室からは須

年度	分布調査	立会調査	試掘調査	確認調査	本発掘調査	発掘面積	職員数	
							調査員	臨時
平成20(2008)年度	92.31	0	8.0	885.3	7,292.67	8,185.97	4	11
平成21(2009)年度	90.0	0	0	500.0	3,213.3	3,713.3	4	10
平成22(2010)年度	0.354	746.5	0	10.0	3,933.5	4,690.0	4	10

\*単位：分布調査 (ha) 調査面積 (㎡) 臨時の職員数はその年度ののべ人数  
調査量と職員数の推移1



調査量と職員数の推移2

恵器・土師器・耳環・玉類等の副葬品が出土している。養宜館跡では堀の一部と思われる遺構を検出することができた。

啓蒙普及活動としては、トライやるウィークで三原中学校（5月17～21日）3名と南淡中学校（5月24～28日）3名を受け入れ、井手田遺跡の発掘作業を中心に行った。市内の小学生対象の『わんぱく塾』では、8月11・12・23・25日に勾玉作りを実施し、8月18・19日に兵庫県立考古博物館へのバスツアーを行った。



トライやる作業中

また埋蔵文化財調査事務所設置20年を記念して、『20年のあしあと展』を市内4ヶ所で開催し、市内を代表する遺跡の展示等を行った。この他に教育委員会が所在する西淡公民館においてミニ展示を行い、年3回の展示物入れ替えを行った。



『20年のあしあと展』の様子

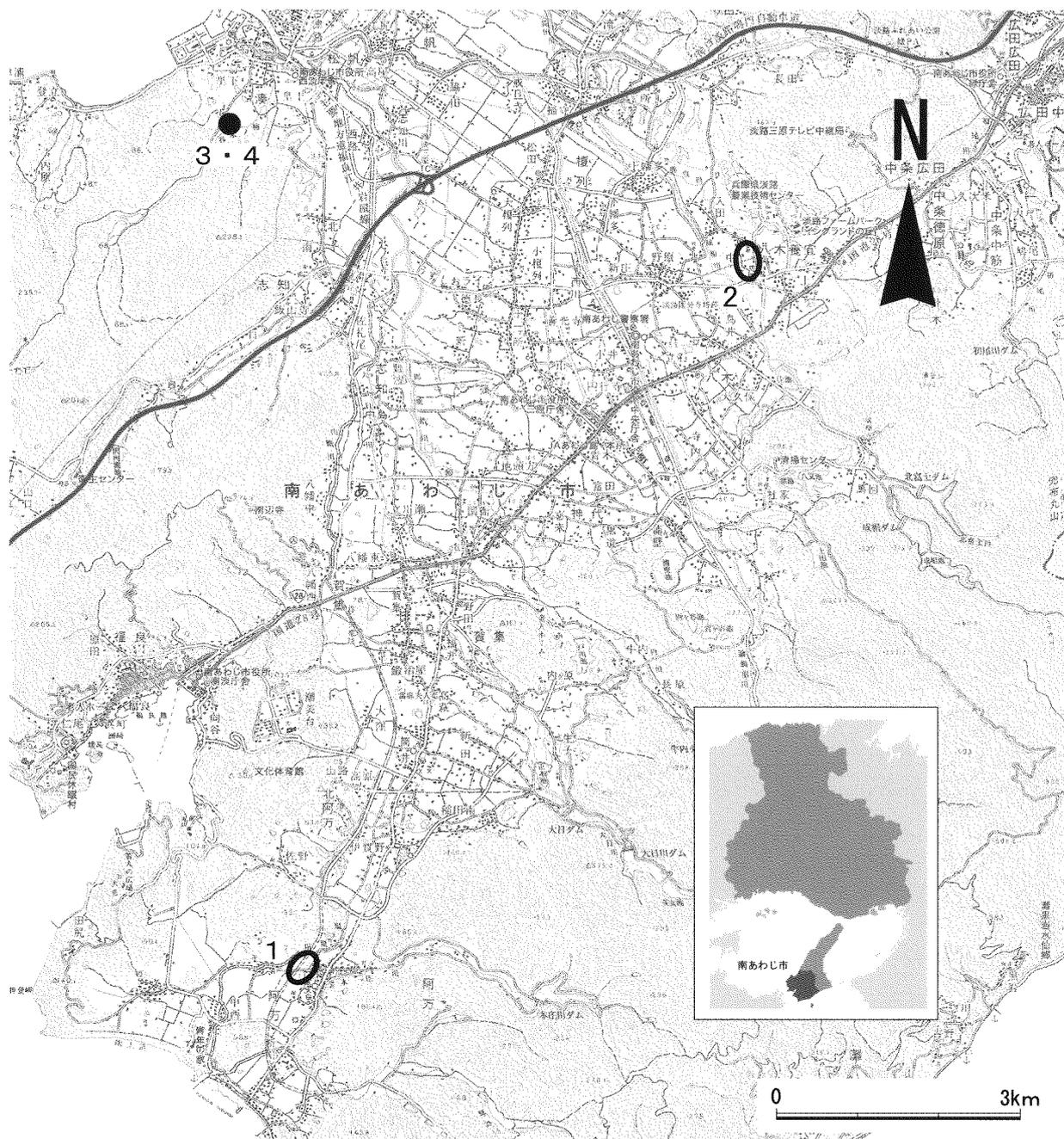
市の合併後、発掘調査報告書の発行が滞っていたが、本年度より年1冊のペースで発行を行っていくことになり、本年度は『高萩遺跡』を発行した。

## 第2章 埋蔵文化財調査の成果

### 第1節 埋蔵文化財調査一覧表および調査位置図

No.	事業名	内容	面積	担当者	遺跡名	所在地1	所在地2	調査期間	調査成果
	市道土井線道路改良事業(倭文土井地区)	分布	3,540㎡	坂口		倭文	土井	H22.4.26	採集遺物なし
1	経営体育成基盤整備事業(阿万本庄地区)	本発掘	2,460.2㎡	山崎	井手田	阿万	上町	H22.5.12~12.2	弥生~室町時代の遺構・遺物確認
2	特定環境保全公共下水道事業(八木榎列7号線管渠布設工事)	立会	746.5㎡	坂口	養宜館跡・戒壇寺跡	八木	養宜中	H22.8.22~11.18	弥生・奈良~室町時代の遺構・遺物確認
	市営住宅建設事業(福良丙地区)	確認	10㎡	的崎・定松	岩谷	福良	丙	H22.11.17・18	遺構未確認
3	経営体育成基盤整備事業(湊里地区)	本発掘	1,270.4㎡	的崎・山崎	里原田	湊	里	H23.1.28~3.8	古墳~江戸時代の遺構・遺物確認
4	経営体育成基盤整備事業(湊里地区)	本発掘	202.9㎡	坂口	里丸山1・2号墳	湊	里	H23.2.3~4.6	7世紀の横穴式石室2基確認

調査一覧表

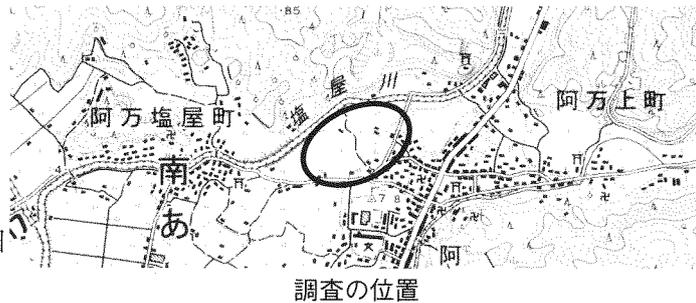


調査位置図

## 第2節 主な埋蔵文化財調査の成果

### 1 井手田遺跡 — 3次調査 —

所在地 阿万上町字井手田外  
事業名 経営体育成基盤整備事業  
担当者 山崎裕司  
種別 本発掘調査  
調査期間 平成22年5月12日～12月2日  
調査面積 2,460.2㎡



#### 1 調査内容

調査区は南あわじ市の南端、塩屋川によって形成された標高4～14mの低平な沖積地上に立地する。全体に北東から南西方向へ緩やかに低くなっていく。北方向には中世の山城と伝えられる郷殿城跡、北東方向には弥生時代後期～終末期・中世の河内遺跡、北西方向には平安時代末と伝えられる塩屋古城跡や弥生～平安時代の初田遺跡などが分布する。また調査地の南西方向には条里型地割の名残と思われる土地区画が見られる。

平成16年度の当事業に伴う分布調査により遺跡の存在が明らかになり、平成18年度には兵庫県教育委員会によって主要地方道洲本灘賀集線（阿万バイパス）道路改良事業に伴う確認・本発掘調査が行われ、旧塩屋川の中州上に弥生時代～中世の複合遺跡が分布することが明らかになった。平成20年度に当事業に伴う確認調査を行い、平成21年度のA-1～3・C地区に続き、平成22年度はA-4～9・B-1～3地区で本発掘調査を行うことになった。なおA-5～9地区は県教委調査区の西側に隣接し、県教委の延長部分が確認された遺構（周溝墓・SB・SH）はその遺構番号を踏襲した。

#### 【A-4地区】

塩屋川の旧河道内に位置すると思われる調査区で、人為的な遺構は検出できなかった。

#### 【A-5地区】

地区周辺は中州が大きく広がっていると推定され、南側では弥生～中世に至る非常に多くの遺構を同一面で検出した。北側は奈良時代頃までの遺物を含む川砂層の上に中世の遺構面が形成されており、中世までは河川の影響を受けやすかったようである。掘立柱建物は複数が重なり合っており、わがりにくいことから、廂部分を含めた一番外側のラインのみ図示した。

#### 弥生時代

周溝墓3（溝455） 中期後半の遺物が出土している。県教委調査区で検出された周溝墓の北西側の溝で、南東～北西の規模が周溝外側で約10.8mであることがわかった。

周溝墓6（溝301・584） 中期後半の遺物が出土している。西側の溝は旧河道の影響で削平されているため正確な東西規模は不明であるが、11.5m以上の規模であることから、周溝墓群中最大規模と推定される。また溝301は調査区外へ延びるため、南北規模も不明である。主体部は確認できなかった。

#### 古墳時代

竪穴住居1・2 住居内の埋土から前期頃と思われる遺物が出土している。切り合いから竪穴住居

1が2より新しい。竪穴住居1は後世の削平により残りが悪いが、柱穴2本を備え、約5.0×3.0mの規模と思われる。竪穴住居2は柱穴2本を備え、約4.2×3.5mの規模で、南西側床面に集石部が確認された。

竪穴住居3 詳細な時期は不明である。後世の削平により周溝等の残りは悪い。柱穴は4本と思われる。約4.9×4.5mの規模である。

SH-11 県教委調査区で検出された中期の竪穴住居の延長で、南北規模が約4.5mであることがわかった。

土坑397 10～20cm大の礫と前期頃の土器が混在した状況で出土した。高坏が比較的多く含まれており、祭祀関連と思われる。玉類の出土は確認できなかった。

#### 奈良時代

SB-10 N56°Wを示す。県教委調査区で検出されている奈良時代の側柱建物の延長で、梁行2間(約3.7m)×桁行3間(約5.8m)の規模と推定される。

#### 平安時代

建物8 N81°Wを示す。東・南側に廂部分が付属する側柱建物である。母屋部分が梁行2間(約4.7m)×桁行5間(約11.6m)で、廂部分を含めると約7.1×14.0mの規模となる。当地区で最大規模である。

#### 鎌倉時代

建物7 N79°Wを示す。四面廂の総柱建物と思われる。母屋部分は梁行2間(約4.8m)×桁行3間(約7.5m)で、廂部分を含めると約6.6×9.4mの規模となる。

建物9 N1°Eを示す。東側に廂が付属する総柱建物と思われる。母屋部分は梁行2間(約4.6m)×桁行3間以上で、廂部分を含めると梁行は約5.6mの規模となる。

建物10 N2°Wを示す。南側に廂が付属する総柱建物と思われる。母屋部分は梁行2間(約4.7m)×桁行3間以上である。

建物13 N84°Eを示す。梁行2間(約4.4m)×桁行3間(約4.9m)の側柱建物である。

建物14 N17°Wを示す。梁行2間(約4.0m)×桁行3間(約5.2m)の総柱建物である。

建物15 N86°Wを示す。梁行1間(約1.8m)×桁行2ないし3間(約3.4m)の建物である。

建物16 N86°Eを示す。梁行2間(約4.3m)×桁行3間(約4.4m)の側柱建物である。

建物17 N85°Wを示す。梁行2間(約4.1m)×桁行2間以上の側柱建物である。

建物18 N79°Wを示す。2間(約4.1m)×1間以上の側柱建物である。

建物19 N1°Eを示す。梁行1間(約2.5m)×桁行2間(約5.8m)の建物である。

建物20 N4°Eを示す。梁行2間(約4.1m)×桁行2間(約4.8m)の側柱建物である。

建物21 N88°Wを示す。2間(約5.3m)×1間以上の建物である。

#### 室町時代

建物11 N4°Eを示す。北・南・西側に廂が付属する側柱建物で、母屋部分は梁行2間(約4.3m)×桁行3間(約5.6m)で、廂部分を含めると約5.5×8.2mの規模となる。

#### 【A-6地区】

地区北東端で旧河道が検出され、周辺で南西方向への流れが北西方向へ変わっている。攻撃斜面にあたることから、周溝墓1や5の一部が削平されている。

## 弥生時代

周溝墓1（溝548・553） 中期後半の遺物が出土した。県教委調査区でも検出されており、東西規模が周溝外側で約10.3m、南北規模が約10.1mであることがわかった。主体部は確認できなかった。

周溝墓2（溝292・540） 中期後半の遺物が出土した。県教委調査区でも検出されており、北東～南西規模が周溝外側で約8.3m、北西～南東規模が約7.7mであることがわかった。

周溝墓5（溝551・552） 今回はじめて検出された周溝墓で、北東側周溝が旧河道により削平され、北西側周溝が調査区外のため、規模は不明である。

## 飛鳥時代

溝298 平成21年度（2次調査）A-1地区、県教委調査区でも検出されている。南東方向へ流れていくように掘削されており、旧河道から水を引くための用水路ではないかと思われる。

## 室町時代

建物12 N86°Wを示す。西側に廂が付属する3間（約5.5m）×2間以上の側柱建物である。

### 【A-7地区】

地区北東部を中心に飛鳥～奈良時代と思われる柱穴が検出され、掘立柱建物5棟が復元できた。地区中央～南側にかけて弥生時代と思われる土坑がいくつか検出されている。

建物22 N16°Wを示す。西側に廂が付属する側柱建物である。母屋部分は梁行2間（約2.9m）×桁行2間（約4.0m）の規模となる。

建物23 N23°Wを示す。東側に廂が付属する総柱建物である。母屋部分は梁行2間（約3.0m）×桁行2間（約3.9m）の規模となる。

建物24 N76°Eを示す。梁行1間（約3.1m）×桁行3間（約6.0m）の建物である。

建物25 N0°を示す。梁行2間（約3.2m）×桁行2間（約3.7m）の総柱建物である。

建物26 N8°Eを示す。梁行2間（約3.9m）×桁行3間（約4.7m）の総柱建物である。

### 【A-8地区】

弥生時代前期頃と思われる土坑等が検出された。A-7地区に隣接するが飛鳥～奈良時代の遺構は確認できなかった。

### 【A-9地区】

地区北西側で旧河道を検出した。工事との関係から地区北端での断ち割りと土器だまりが形成されていた南東側肩部のみ掘削作業を行った。弥生時代前期後半頃の遺物が出土している。東側を中心に柱穴状の遺構が多数検出されたが、建物としての復元はできなかった。

土坑219・220 東西に並んで検出された弥生時代前期後半頃の土坑である。竪穴住居を想定して掘削をすすめていったが、柱穴が検出できなかったことと湧水があったと推定されることから、住居ではなく作業場等に利用するために掘削された土坑と思われる。土器片やサヌカイト片等が出土している。

### 【B-1・2地区】

北側に弥生時代終末期～古墳時代前期頃の土器だまりが形成されていた。周辺は粒子の細かい粘砂質土が厚く堆積していることから、流れがあまりない低湿地帯であったと推定される。土器だまりには高坏や小型丸底土器等の供献土器が多く含まれ、玉類（管玉2点・ガラス玉1点・白玉7点）も出土していることから、周辺で祭祀が行われていたと推定される。

### 【B-3地区】

流路4は小規模な流路で、奈良時代頃の遺物が含まれていた。流路1北肩部からは弥生時代終末

期～古墳時代前期頃の土器が集中して出土している。

## 2 まとめ

弥生～室町時代の遺構・遺物を確認した。時期別に調査成果をまとめておく。

A-7～9地区で弥生時代前期後半頃の土坑等を検出した。ただし堅穴住居は確認できなかった。旧河道に近い居住には適していなかったのではないかとと思われる。

A-5・6地区で弥生時代中期後半の方形周溝墓群が検出された。県教委で検出されていた周溝墓1～4に加え、今回周溝墓5・6が新たに検出され6基となった。ただし残念ながら今回も主体部は検出できなかった。周溝墓6は中期の周溝墓としては淡路島内の調査例で最大規模と推定され、島内の中心的な集落が存在したことは間違いのないと思われる。

A-5地区やB-1～3地区で古墳時代前期頃の遺構が検出された。A-5地区では堅穴住居や祭祀関係と思われる土坑397を検出した。B-1～3地区では水際付近と思われる場所に土器だまりが検出された。この時期に祭祀行為が極めて盛んに行われていたことが伺える。また遺跡が中州上に立地することから、川や水と深く関わりをもった祭祀と推定される。

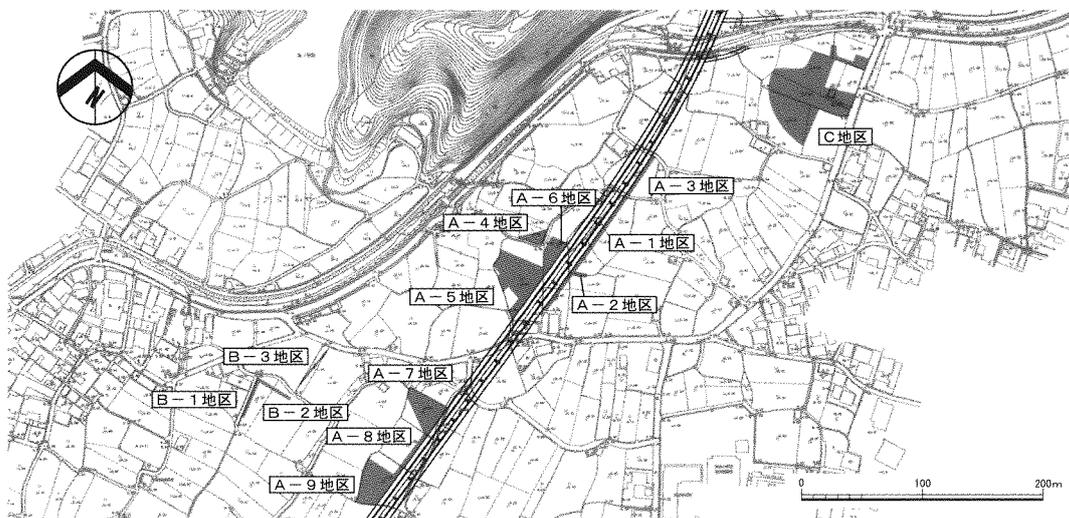
A-5・6地区やA-7地区で飛鳥～奈良時代の掘立柱建物等の遺構が検出された。A-5・6地区周辺は居住域であったと考えられるが、A-7地区では総柱建物が多く、土器等の出土遺物も少なかったため、居住建物でなく、倉庫を中心とした建物群と思われる。南～南西方向には条里型地割が広がっており、周辺の収穫物を納めるための倉庫群と推定される。

これまで平安時代の建物は未検出であったが、A-5地区で規模の大きな建物8を検出した。廂部分を含めると約100㎡となり、一般住居とは考え難い規模である。

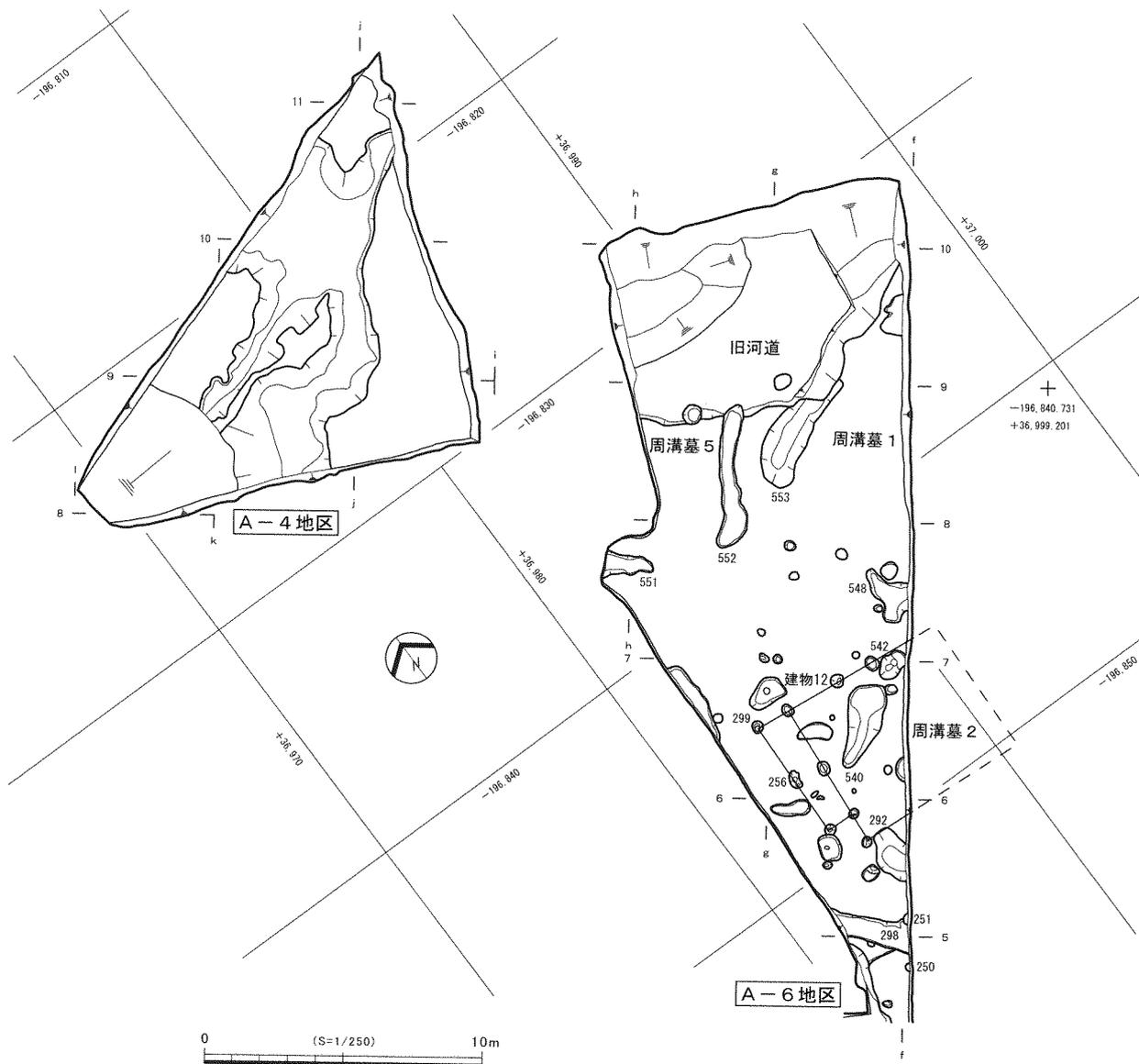
A-5地区では鎌倉時代の建物が12棟と非常に多く検出され、1次調査や県教委調査をあわせると30棟近い規模となり、阿万地域の中心的な集落があったと推定される。阿万庄は「淡路国大田文」(1223年)に「田百三町」と記され、当時淡路国で賀集庄に次ぐ広大な耕地面積を誇っていた。ここに大きな集落が形成される要因として、塩屋川下流域の三角州地帯の大規模な耕地開発がその背景にあったのではないかとと思われる。

室町時代に入ると建物は2棟に減少する。おそらく「本庄」と呼ばれる東方向の八幡神社周辺に集落が移動すると推測される。

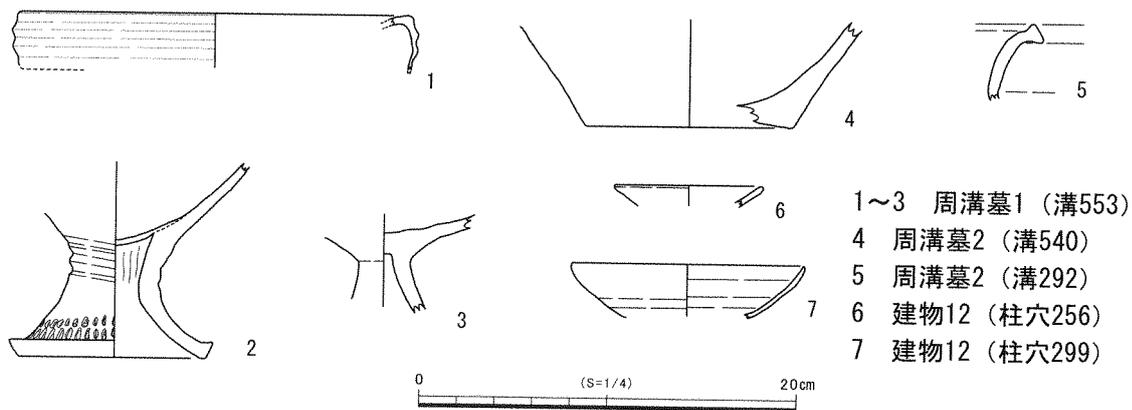
(山崎)



調査区設定図

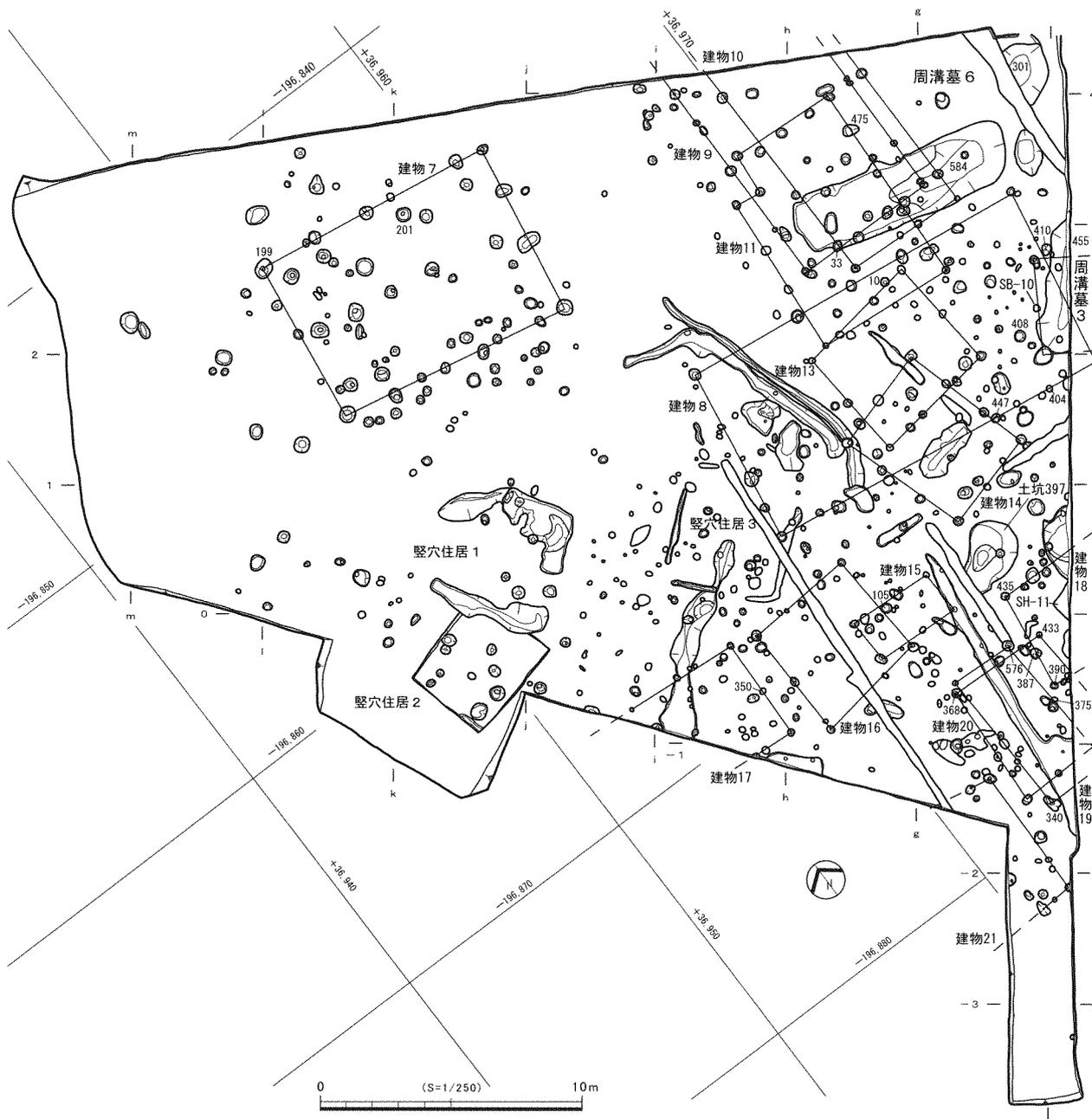


A-4·6地区 平面图



- 1~3 周溝墓1 (溝553)
- 4 周溝墓2 (溝540)
- 5 周溝墓2 (溝292)
- 6 建物12 (柱穴256)
- 7 建物12 (柱穴299)

A-6地区 出土遺物



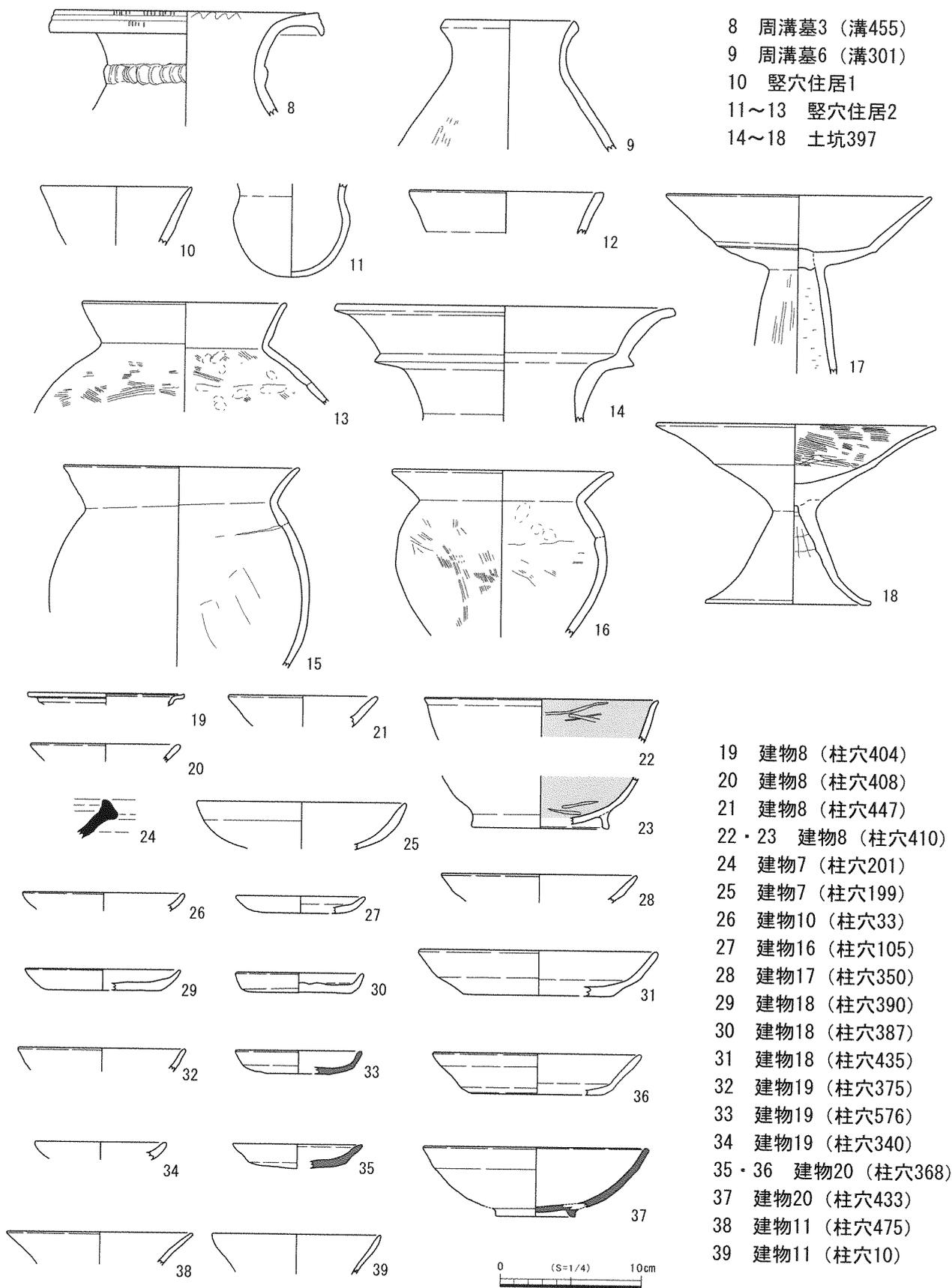
A-5地区 平面図



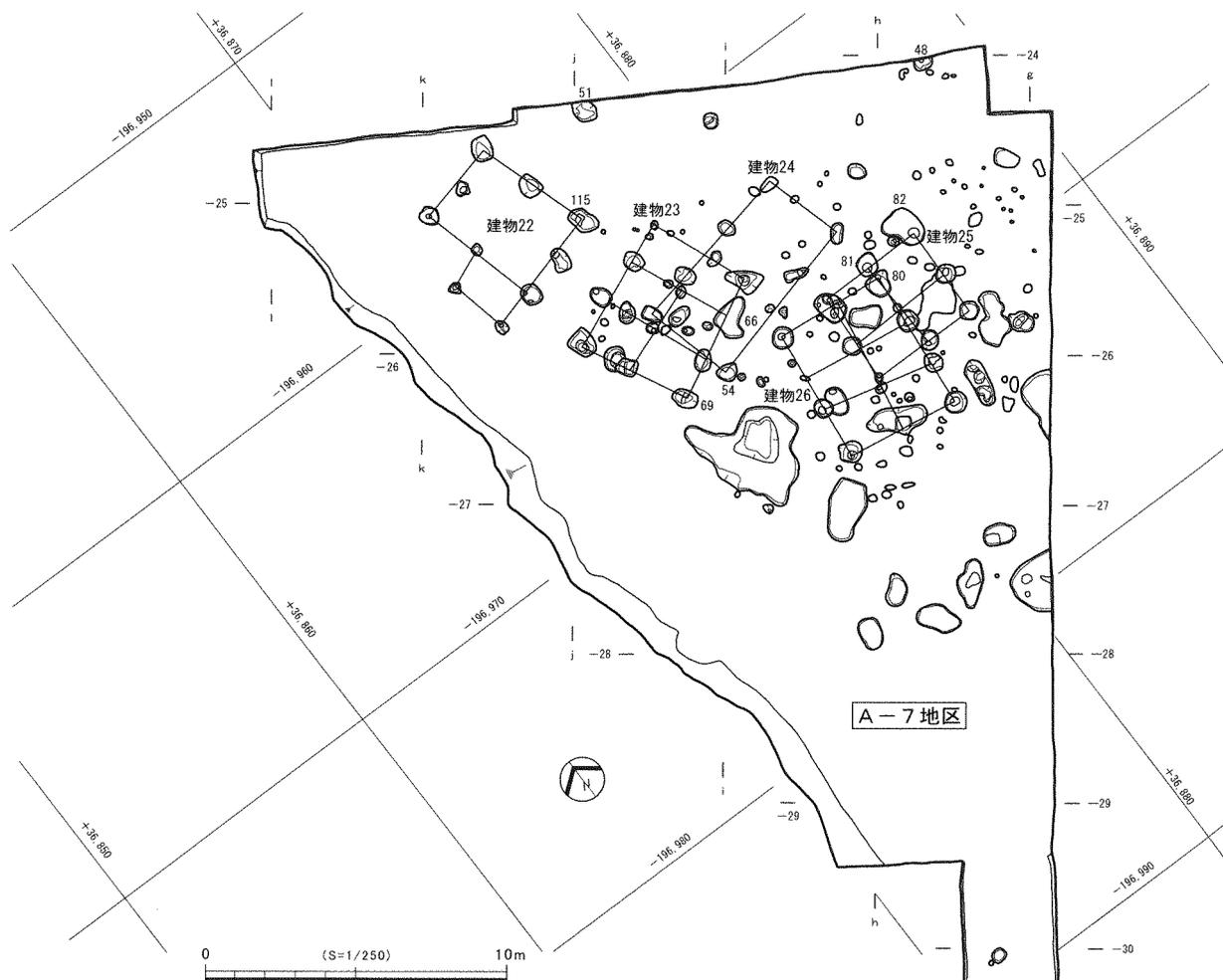
A-5地区 竖穴住居 2 (北より)



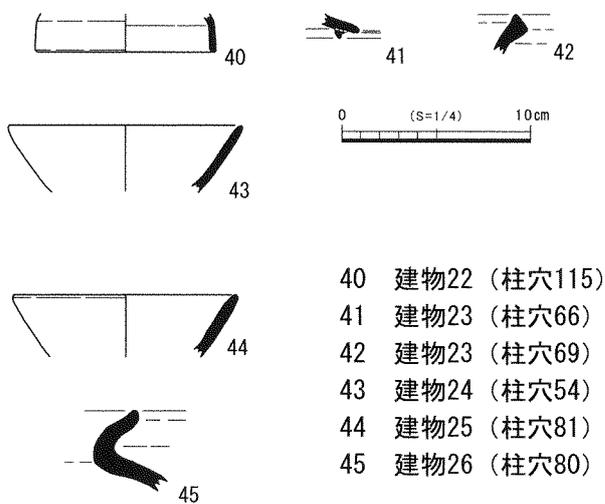
A-5地区 土坑 397 (北東より)



A-5地区 出土遺物

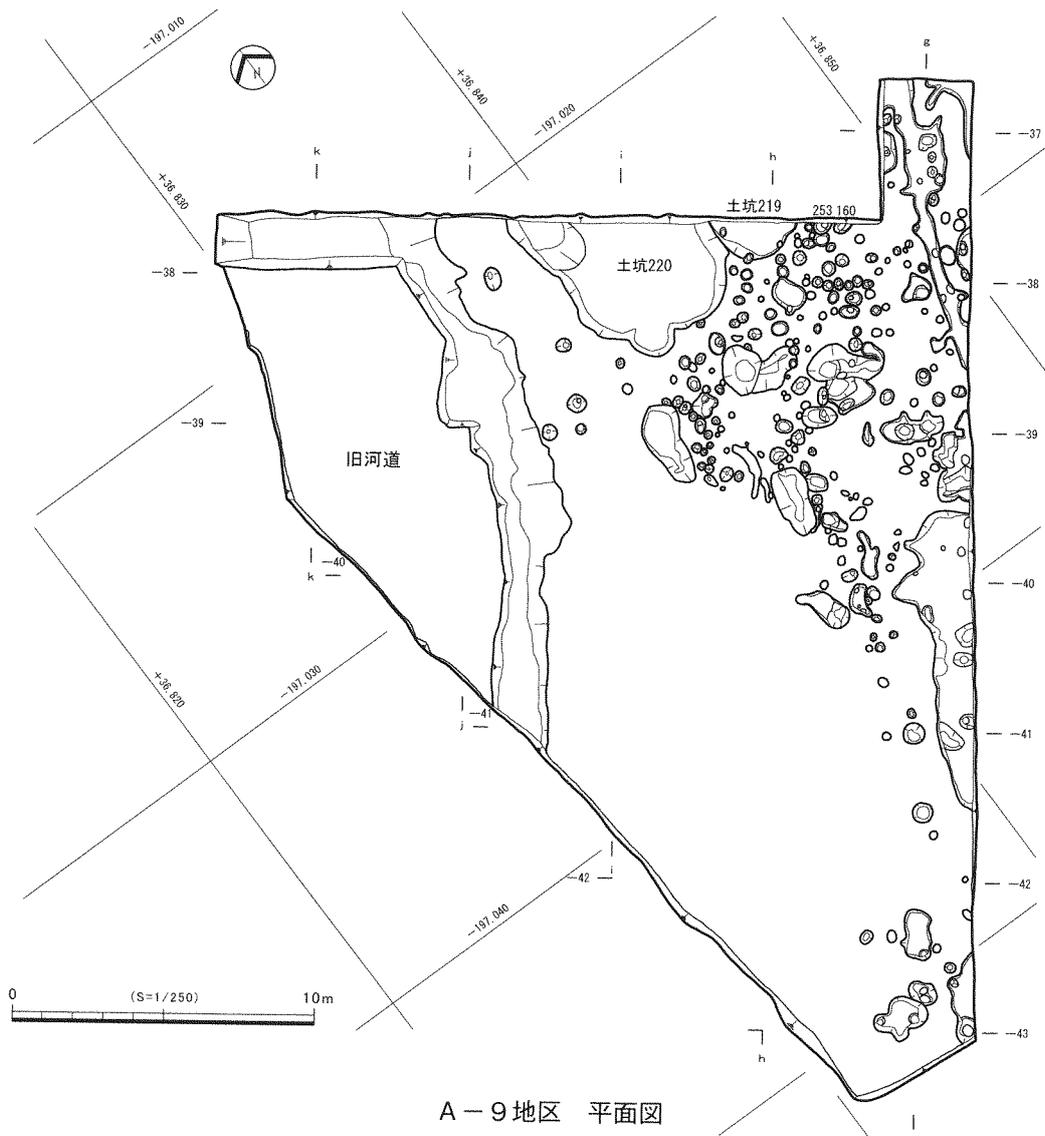


A-7・8地区 平面図

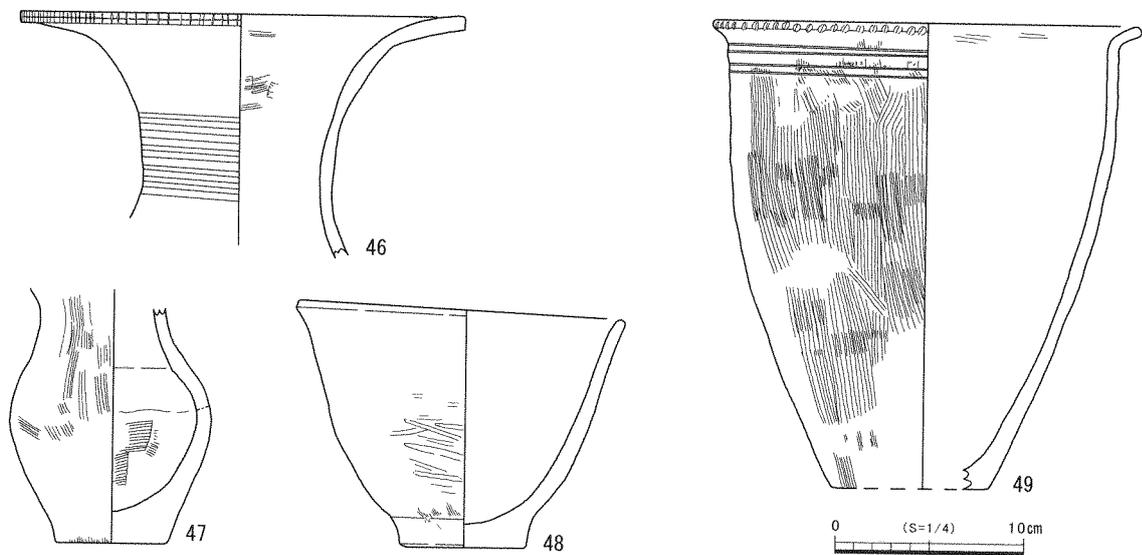


- 40 建物22 (柱穴115)
- 41 建物23 (柱穴66)
- 42 建物23 (柱穴69)
- 43 建物24 (柱穴54)
- 44 建物25 (柱穴81)
- 45 建物26 (柱穴80)

A-7・8地区 出土遺物

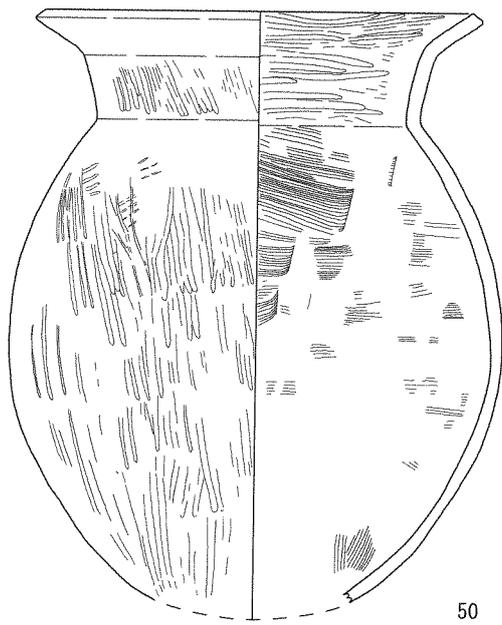


A-9地区 平面图

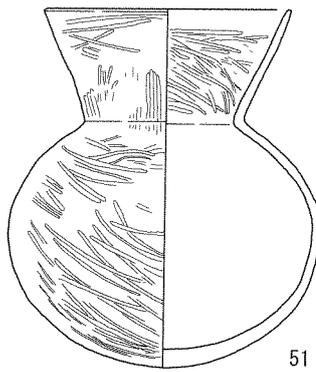


A-9地区 旧河道 出土遗物





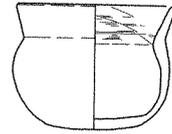
50



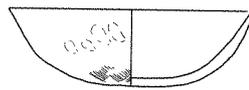
51



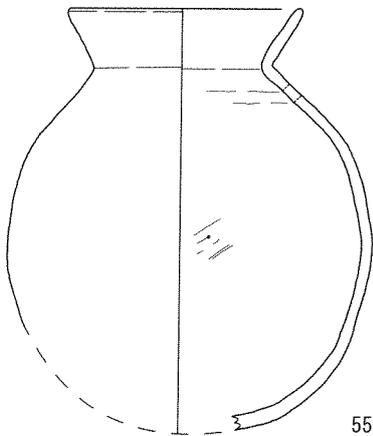
52



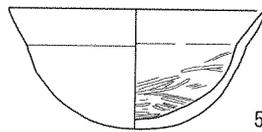
53



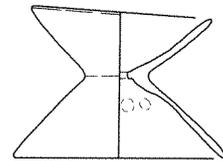
54



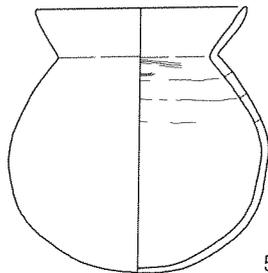
55



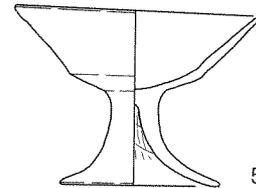
56



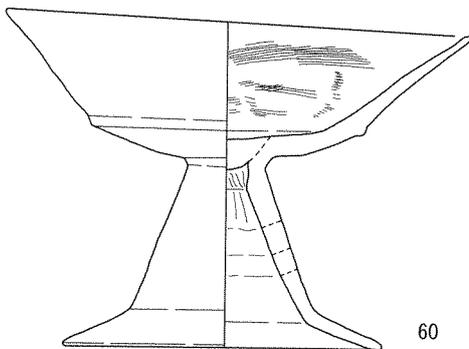
58



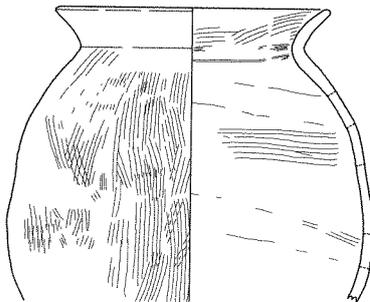
57



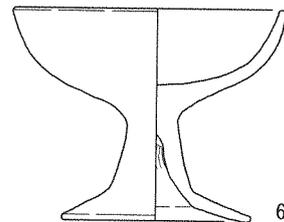
59



60



61



62

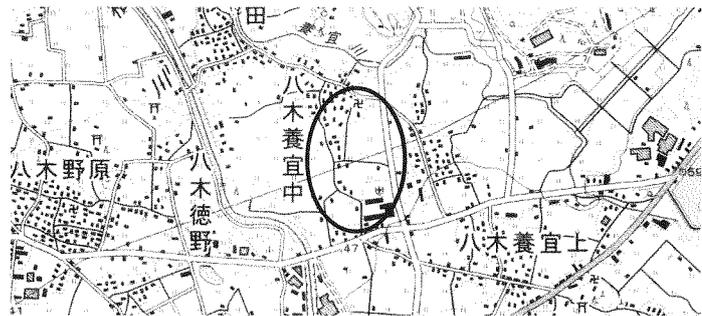
50~60 B-2  
(e'~f'—37ブロック)  
61・62 B-3 (流路1)

B-2・3地区 出土遺物

0 (S=1/4) 10cm

2 やぎやわたあと かいだんじあと  
 2 養宜館跡－2次調査－・戒壇寺跡－1次調査－

所在地 八木養宜中  
 事業名 特定環境保全公共下水道整備  
 事業 (八木榎列7号管渠布設工事)  
 担当者 坂口弘貢  
 種別 立会調査  
 調査期間 平成22年8月22日～11月18日  
 調査面積 746.5㎡



調査の位置

1 調査内容

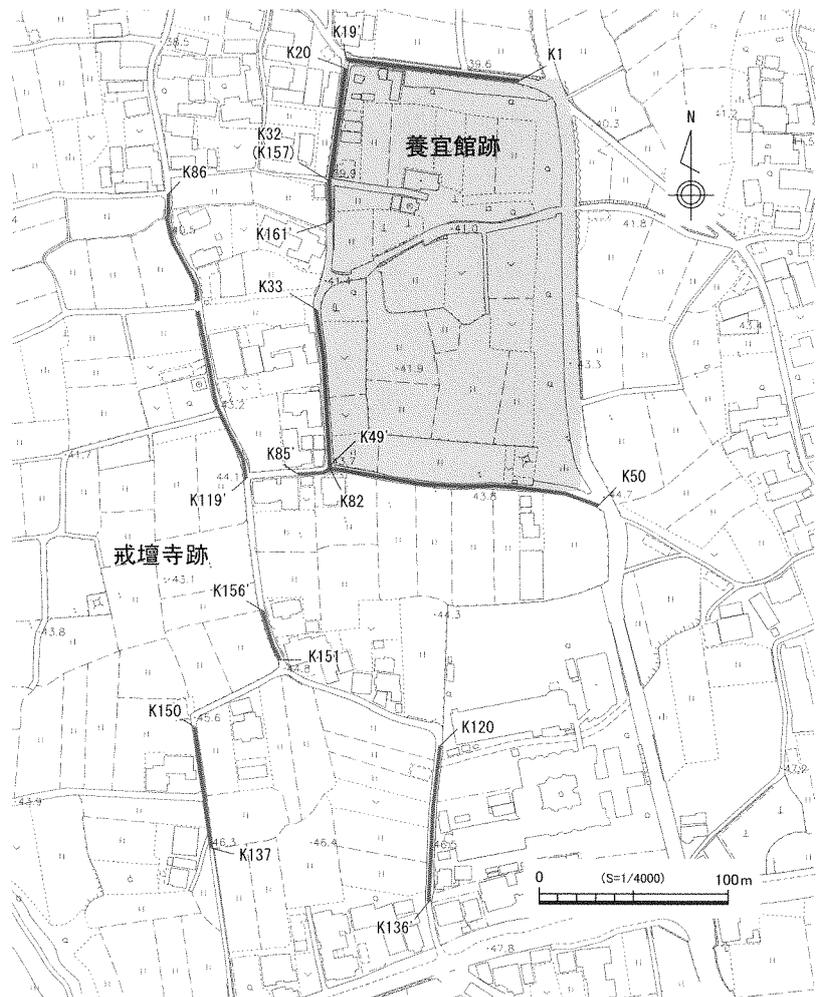
養宜館跡は、三原平野北東部養宜中地区に位置する中世の守護所とされる館跡である。現在館跡の東と北側には土塁が残り、県指定史跡となっている。今回この養宜館跡周辺での下水道配管工事に伴い、調査を行うことになった。

調査地は、成相川中流右岸域に位置しており、標高39.15m (K19' 地点)～46.88m (K136' 地点)を測る道路部分からなり、大きく東部の養宜館跡 (K1～K85' 地点・K157～K161' 地点)と西部の戒壇寺跡 (K86～K156' 地点)の2ヶ所に区分される。調査は下水道配管予定地を幅約1mで重機掘削し、遺物の採集、壁・床面精査の後、写真・図面記録作業を行い、夕方には歩行者・車両が通行可能なように仮舗装までの作業を1日単位で進めていった。

以下主要部分の概要を記す。

【K33～K49' 地点】

養宜館跡南西部に位置する。調査区北部は礫を含む土層となり、ベースが判然としないが、35区以南は比較的安定した土層堆積となり、中世頃の遺物を含む層の下で遺構を確認した。43～44区のSD3、45～46区のSD4はいずれも南北方向の溝状の遺構である。規模は、SD3が南北4.1m以上、深さ11cm以上、SD4は南北7.2m以上、深



調査区設定図

さ48cm以上をそれぞれ測る。館跡西側の堀肩部になるものと思われる。

#### 【K50～K85' 地点】

養宜館跡南部に位置する。58～61区では現地盤より約1.3m下で弥生時代後期頃の土器（2～8）が出土しており、その下でSK 6やSX 7・8の遺構を確認した。掘削深度が非常に深く安全確保が十分できなかったことから、遺構掘削はSK 6のみとなったが、同時期と思われる遺物（1）が出土しており、周辺には弥生時代後期頃の遺構が広がるものと思われる。

79～80区では、現地表面より約1.4m下で東西方向の溝状の遺構（SD12）を確認した。規模は東西5.3m以上、深さ70cm以上を測る。西端部で北側にわずかにカーブする状況が見てとれる。館跡の南側の堀肩部にあたと想定され、先の43～46区で確認したSD 3・4に続くものと思われる。遺物は、土師器の皿類が重なるように比較的まとまって出土している（9～14）。皿の口縁部には煤が認められるものがあり、灯明皿に使用されていたものと思われ、形態の特徴から室町時代でも後半頃の資料と考えられる。

#### 【K86～K119' 地点】

養宜館跡の約45～85m西側に位置する。北半の86～105区周辺までは、近世頃の遺物が極少量出土する程度であるが、106区以南は古代～中世頃の遺物量が多くなる。古代の遺物は113区周辺から南では中世の遺物に混じっての出土が中心となり、須恵器・土師器などの他に瓦類がある。115区では淡路国分寺跡軒丸瓦SKM25型式（『国分遺跡』三原町教育委員会・三原郡広域事務組合2004年）と同範と思われる軒丸瓦（15）、113区では埴状の瓦片（16）が含まれていることが注意される。

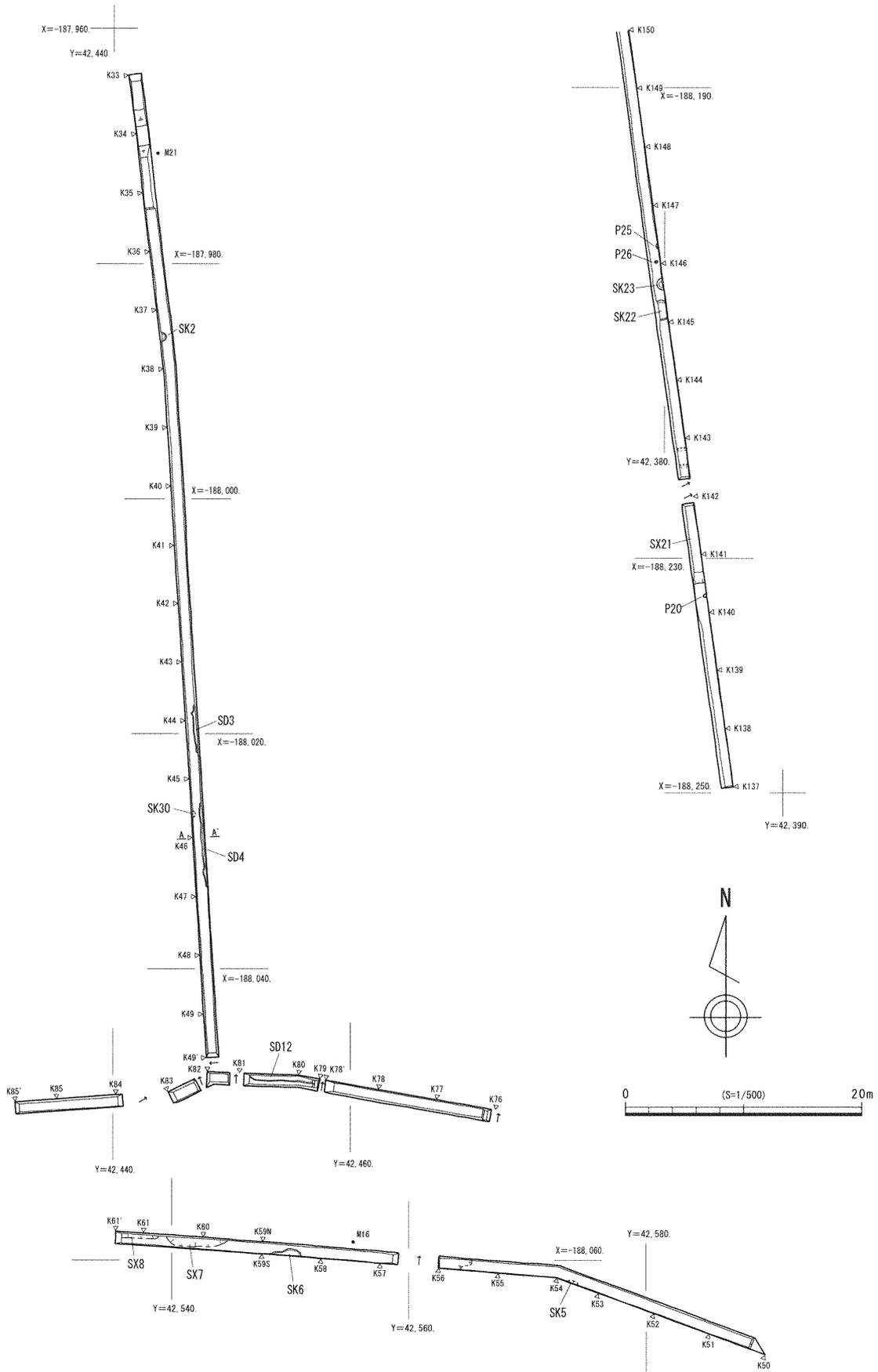
#### 【K137～K150地点】

養宜館跡の約155～210m南西に位置する。調査区の中央部で遺構を確認した。140～142区のSX21は、南北約12m、深さ約50cmを測る落込みで、弥生時代終末期頃と思われる遺物（17・18）がわずかに出土している。145～146区では土坑（SK22・23）や小穴（P 25・26）などを確認した。SK22や遺物包含層からは9世紀頃の須恵器（19）・土師器（20）が出土しており、同時代の遺構と思われる。また140～146区の遺物包含層からは古代の瓦類が比較的まとまって出土しており、その中には142区から志筑廃寺軒丸瓦Ⅲ類（『志筑廃寺発掘調査報告Ⅱ』淡路市教育委員会2008年）と同文の軒丸瓦（21）、141区で淡路国分寺跡軒平瓦SKH12型式（『国分遺跡』三原町教育委員会・三原郡広域事務組合2004年）と同範の軒平瓦（22）が1点ずつ確認できた。

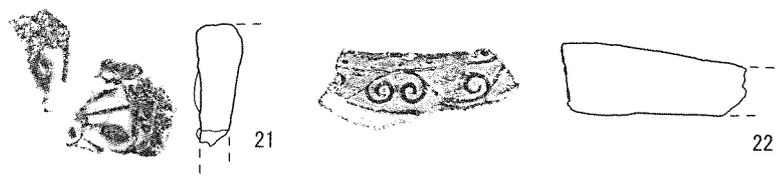
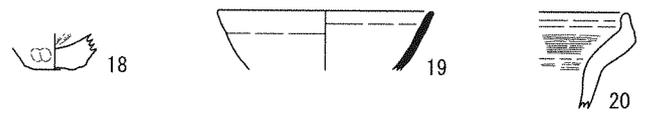
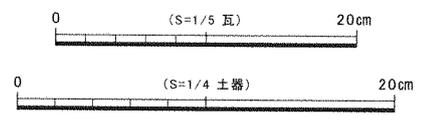
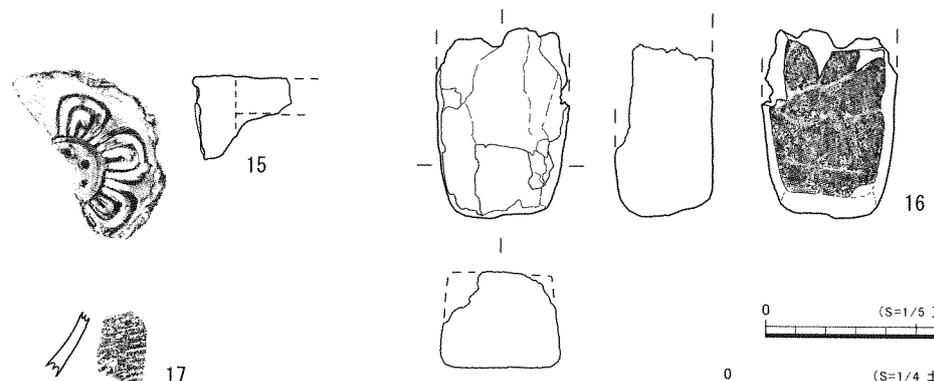
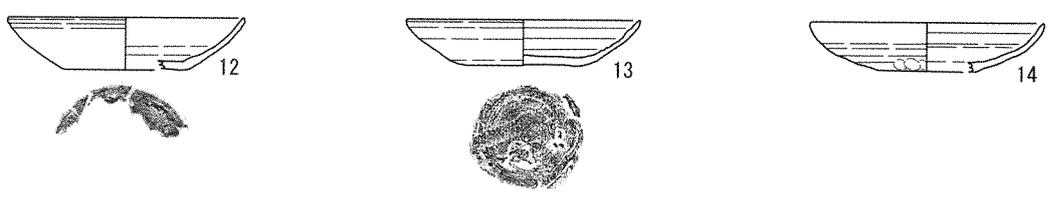
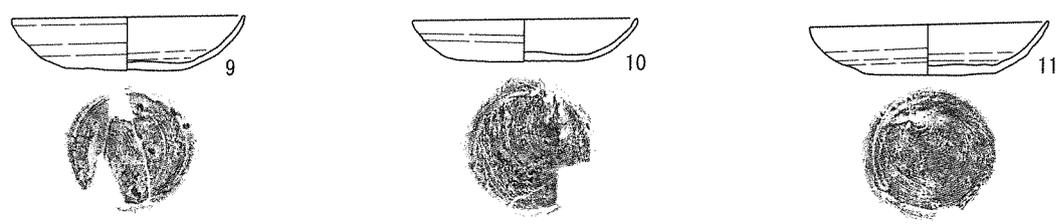
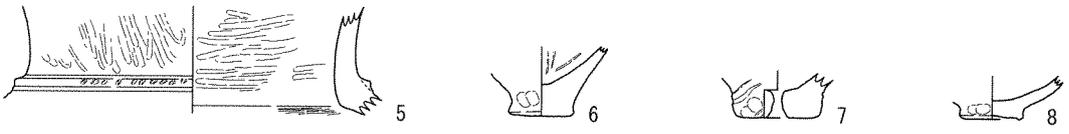
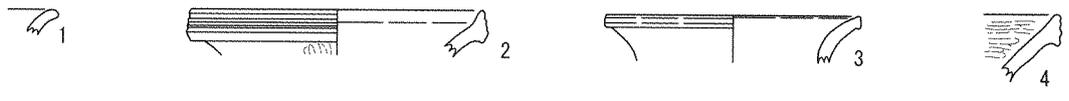
## 2 まとめ

本調査により、弥生時代・古代・中世頃の遺構・遺物を確認することができた。調査区幅が狭く、詳細は今後の課題として残るが、養宜館跡西側と南側において、堀跡と考えられる溝状の遺構が確認できたことは、最大の成果といえよう。現状では館跡西側と南側において堀跡を示すような地形変化は認められないが、本調査成果や『淡路草』（1825（文政八）年）に描かれた絵図などから西側・南側においても土塁と堀を備えた南北約220m、東西約120mの城館であったと想定され、規模や文献史料などから室町時代の守護所であったことはほぼ間違いないものと思われる。

戒壇寺跡については、これまで淡路国分寺跡などと同範関係にある採集資料の軒瓦が幾つか知られているにすぎなかった。しかし、今回中世の遺物に混じっての二次堆積が中心とはいえ、磨耗が少ない比較的大きな瓦片がまとまって出土した上に軒瓦や埴が出土していることから、本地周辺には埴積施設を有する奈良～平安時代頃の寺院跡が存在する可能性が非常に高くなった。



調査区平面図



- 1 58区 SK6
- 2~8 58~61区 遺物包含層
- 9~14 80区 SD12
- 15・16 113~115区 遺物包含層
- 17・18 140~142区 SX21
- 19・20 145区 SK22
- 21・22 141~142区 遺物包含層

出土遺物

また、養宜館跡南部（58～61区）や戒壇寺跡（140～142区）で弥生時代後期・終末期頃の遺構・遺物を確認することができた。おそらく成相川右岸域では発掘調査による弥生時代遺跡の初めての確認例となろう。これまで、成相川左岸域では幡多遺跡を中心に弥生時代の遺跡が展開する状況が把握できており、今後右岸域での弥生時代遺跡の動向も注意される。（坂口）



調査地遠景（北より）



79～80区 SD12（西より）



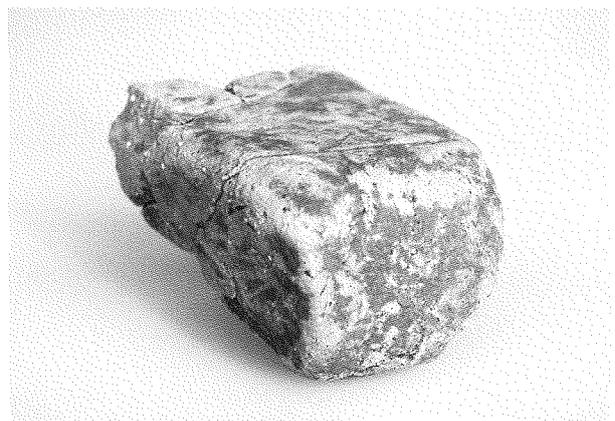
軒丸瓦 1（15）



軒丸瓦 2（21）



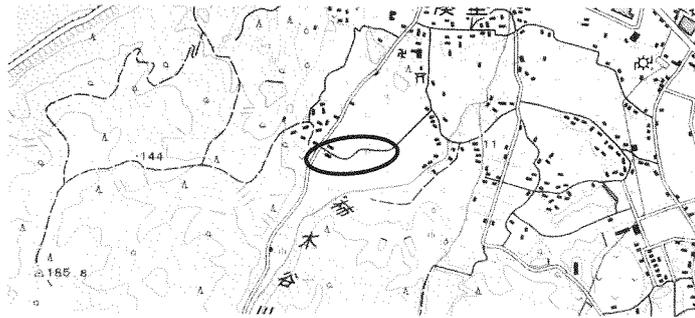
軒平瓦（22）



塼（16）

### 3 里原田遺跡 - 2次調査 -

所在地 湊里字丸山外  
事業名 経営体育成基盤整備事業  
担当者 的崎薫・山崎裕司  
種別 本発掘調査  
調査期間 平成23年1月28日～3月8日  
調査面積 1,270.4㎡

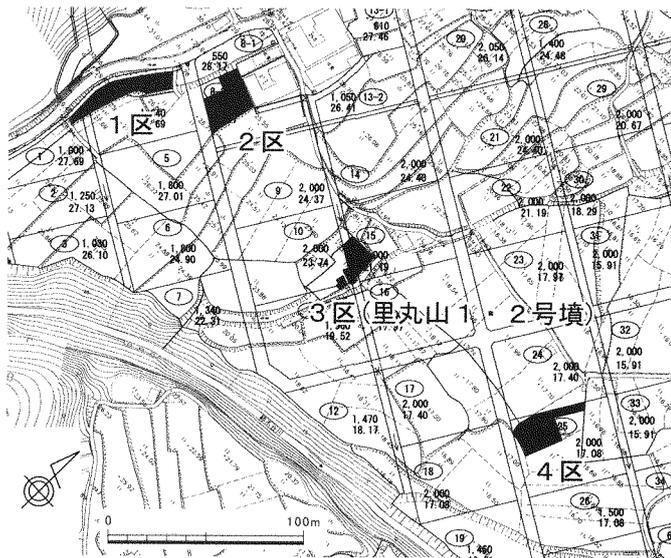


調査の位置

#### 1 調査内容

本調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野が播磨灘に面した柿木谷川左岸段丘上に位置する。標高は17.2～28.3mの田園地帯である。周辺には山の口古墳や式内社である湊口神社、湊城跡（室町時代）、平石遺跡（弥生～中世）、後山遺跡（弥生・平安・室町時代）等、多くの遺跡が立地する。

上記事業に伴って平成21年度に確認調査を行った結果、古墳時代と中世の遺構・遺物を確認したことから、事業施工によって遺跡に影響の及ぶ排水路部分と圃場面に関して記録保存を行うこととなった。調査は1～4区に分けて行った。以下、調査区ごとに記述する。



調査区設定図

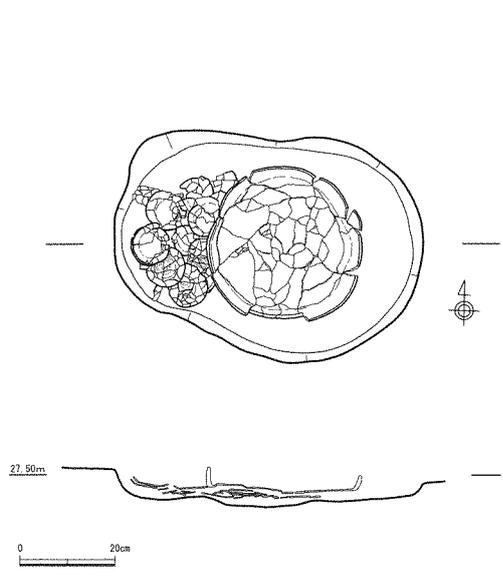
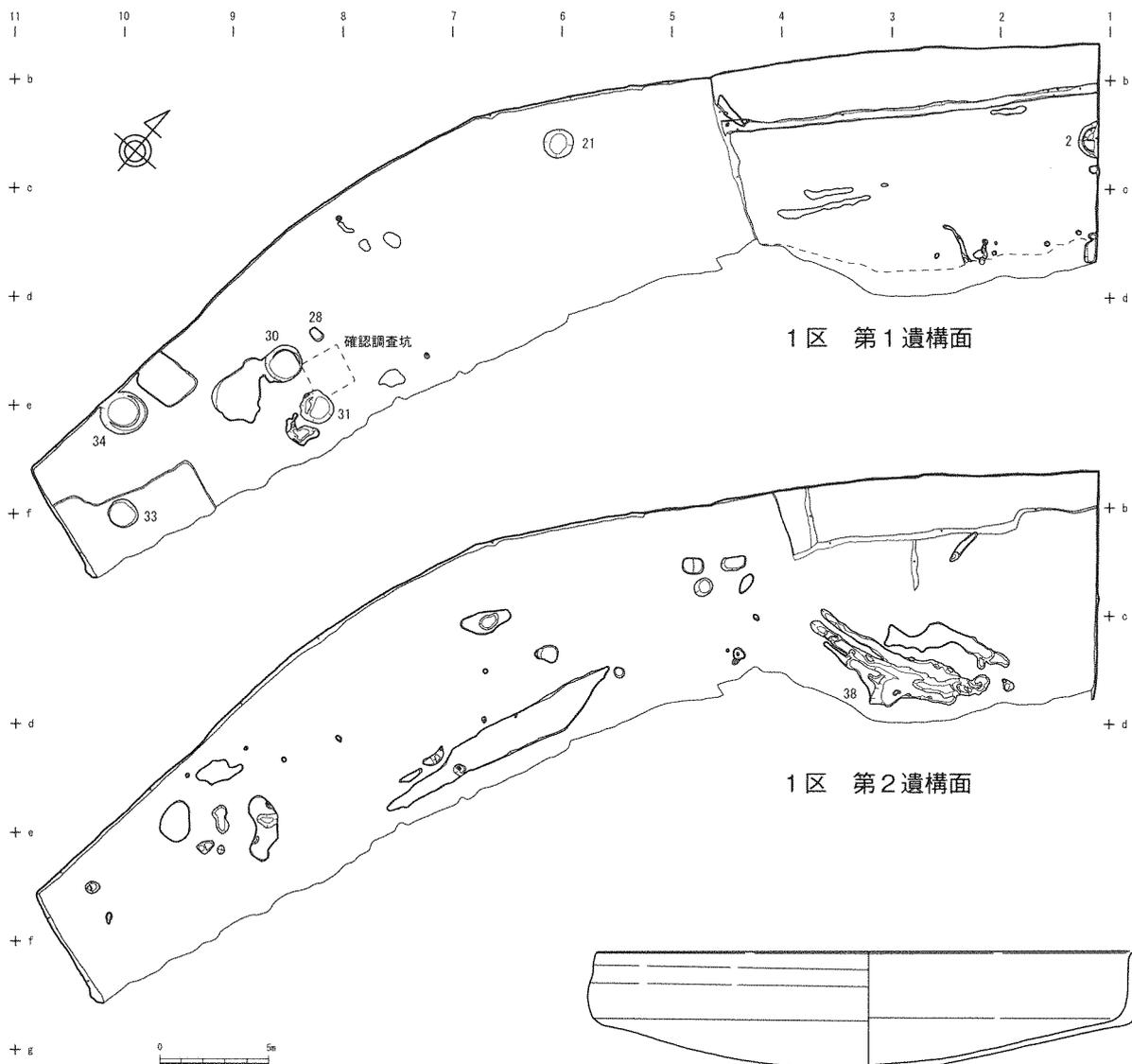
#### 【1区】

市道沿いの細長い調査区である。調査面積は477.3㎡であるが、遺構面が2面あったため延べ面積は954.6㎡となった。

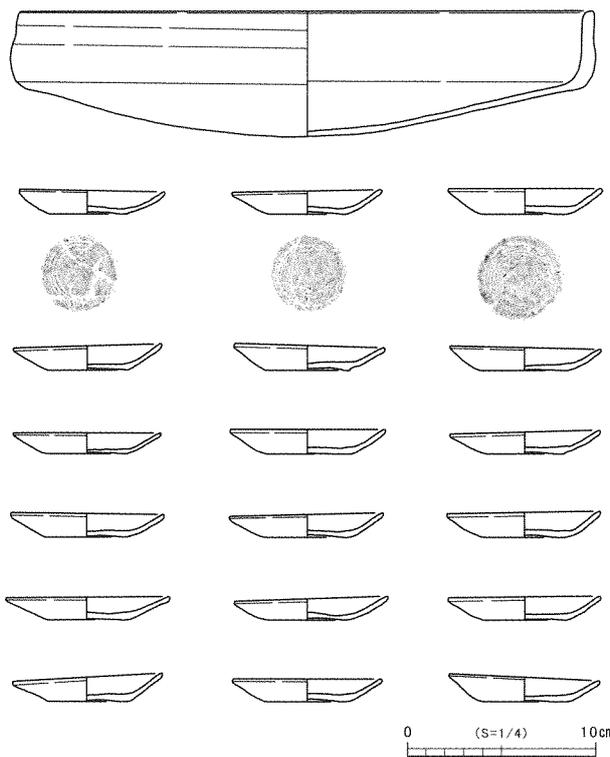
第1遺構面は黄褐色系粘砂質土をベースにして、溝や肥溜め・土坑などを検出した。肥溜めは直径1.3～2.2mのものを6基（遺構2・21・30・31・33・34）確認した。底の方には曲物が残っていたものもあり、陶磁器類や瓦などが出土した。遺構28は長径64cm・短径48cmの浅い楕円形の土坑で、焙烙1点とその周りや下から土師質土器皿が30点以上出土した。土師質土器皿は底部回転糸切りで、口径7.8～8.1cm（7.55cmと8.6cmが1点ずつあり）・底径4.0～4.5cm・器高1.1～1.5cmの範疇にある。第1遺構面は出土遺物から18世紀を中心とした江戸時代の遺構と考えられる。

第2遺構面では、地山をベースに溝や土坑を確認した。遺構38は溝で古代～中世の須恵器や土師質土器片が出土した。

1区では第1遺構面・第2遺構面ともに建物を構成する柱穴が確認できなかったことから、居住域ではなかったと考えられる。



1区 遺構 28 遺物出土状況



1区 遺構 28 出土遺物

## 【2区】

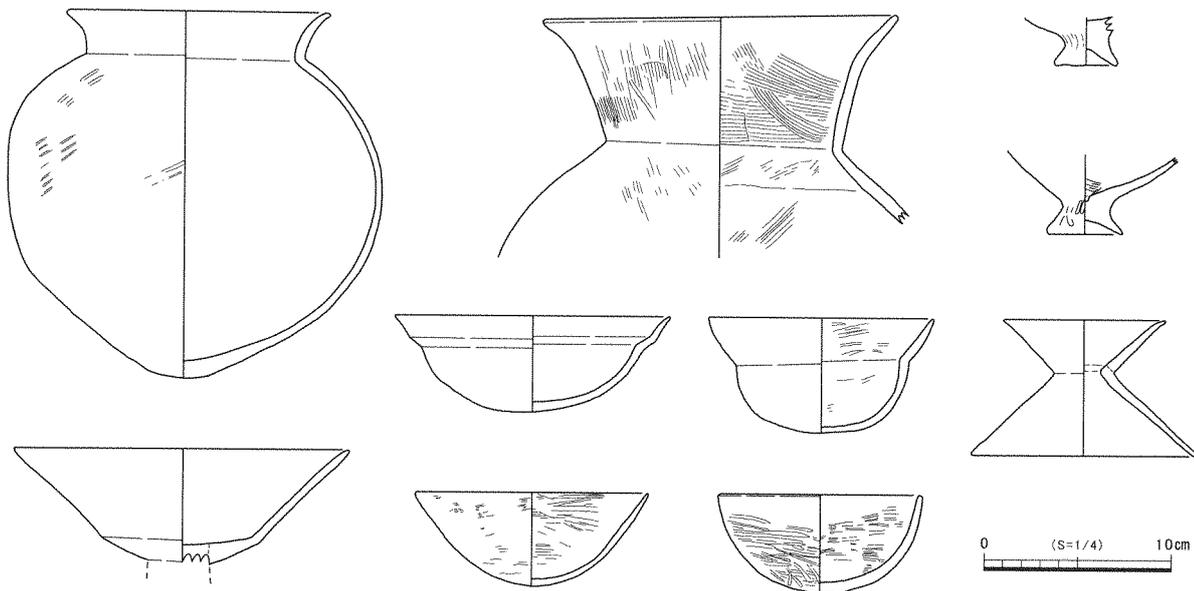
調査面積は444.4㎡である。近年に3筆の細長い田圃を1筆にしたようで、北西部では地山が大きく削平され、調査区全域を覆っていた盛土には現代のビニールなどが混入していた。遺構は中央部で北西から南東方向に向かって流れる浅い自然流路や土坑などを確認した。遺物が出土していないため時期は不明であるが中世より遡るものではない。

## 【3区】

3区調査中に未確認の古墳を発見し、里丸山1・2号墳と命名してP22～24に別途詳細を述べる。

## 【4区】

調査面積は348.7㎡である。調査区の南側に河岸段丘の跡と思われる斜面が検出された。この斜面より北側では床土層に遺物が含まれる程度で出土量は非常に少なく、遺構も全く検出されなかった。斜面より南側では多くの遺物が出土している。最下層の自然堆積土からは須恵器片が出土しており、詳細な時期は不明であるが、古墳時代以降の遺物が含まれる。この層の上には人頭大の礫を含む層が厚く堆積している。地元住民の談によると周辺では江戸時代に大水があり、民家が流されるなど大きな被害があったらしい。この時のものかは不明であるが、この厚い礫層も土石流により堆積したものと思われる。この礫層上部および礫層の上に堆積する攪乱状の土層からは古墳時代初頭～前期を中心とする極めて多くの土器が出土し、中には脚台Ⅲ式の製塩土器も含まれている。おそらく耕地造成の際に北側段丘上に展開していた遺構等を削平し、段丘下の盛土を行っていったものと推定される。



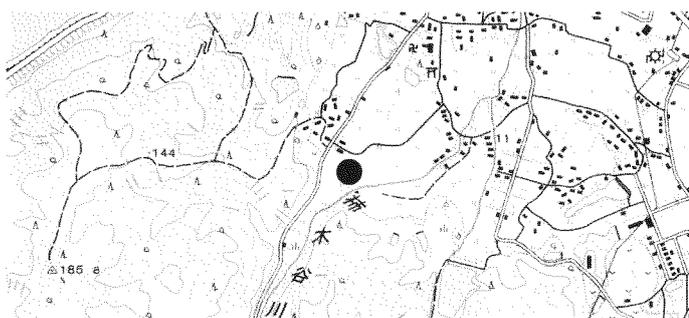
4区 出土遺物

## 2 まとめ

1区では確認調査において時代不明の大型柱穴の一部と思われる遺構を検出していたが、それは江戸時代の肥溜めの一部であったことがわかった。また、1・2区周辺は中世の土器や僅かな遺構はあったものの、建物跡が確認できなかったことから居住域ではなく遺跡の縁辺部と考えられる。4区では遺構は確認されなかったものの、古墳時代の土器が多く含まれる盛土を確認したことから、周辺にこの時代の遺構が存在する可能性が高い。(的崎・山崎)

4 里丸山1・2号墳

所在地 湊里字丸山  
事業名 経営体育成基盤整備事業  
担当者 坂口弘貢  
種別 本発掘調査  
調査期間 平成23年2月3日～4月6日  
調査面積 202.9㎡



調査の位置

1 調査内容

調査区の現状は、西から東に階段状に傾斜する水田からなる。西側の田面との高低差が約50cmであるのに対して、東側の高低差は3m以上を測る東方に開けた段丘面の先端部に位置する。

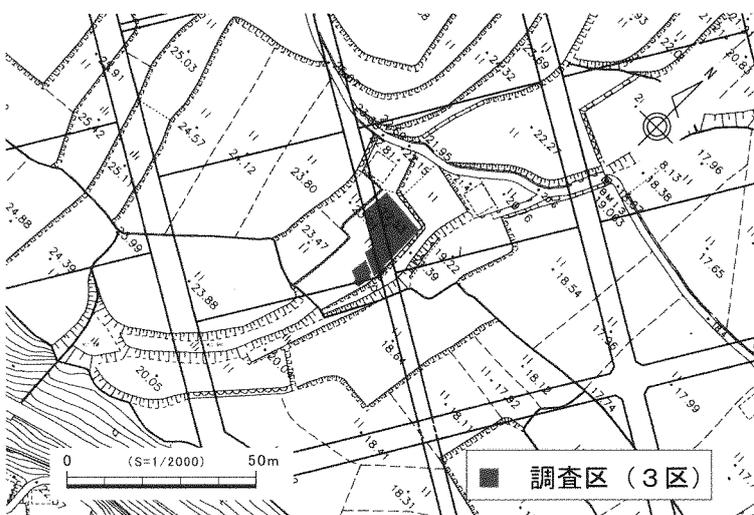
調査は、当初里原田遺跡2次調査（3区）として西端の長さ約16m、東端の長さ13.5mの台形の調査区を設定し進めたところ、南東部で石室状の集石が認められたため、調査区の拡張及び追加を行った。

調査の結果、近世後半頃の土坑（SK 1・2・9・17）や溝（SD15・22）と古墳時代後期の溝（SD 6）、横穴式石室を持つ古墳（2基）などを確認した。2基の古墳については、これまで周知されていないことから、北側から里丸山1号墳・2号墳と呼ぶことにした。

1号墳は、南東方向に開口する横穴式石室墳である。墳丘は近世以降に削平されたと思われるが、北側に残る溝（SD11）を周溝と考えると直径7～8mの円墳または方墳が想定される。石室は無袖式で、幅90cm、長さ約4mを測る。出土遺物には、須恵器（1～10）・土師器・ガラス玉・勾玉・管玉・耳環・鉄釘・鉄製品・金銅製の鈴がある。

2号墳は、1号墳の南に位置する南東方向に開口する横穴式石室墳である。1号墳同様に墳丘は削平されているが、北～西側に残る溝（SD25）から直径5～6mの円墳と考えられる。石室は、部分的なサブトレンチのみの掘削であるが、無袖式と思われ、幅90cm、長さ2.9m以上を測る。石室の傾きが1号墳石室とほぼ同じで、奥壁の延長線上に1号墳の入口周辺が位置する。出土遺物には、須恵器（11・12）・鉄釘・鉄製品がある。

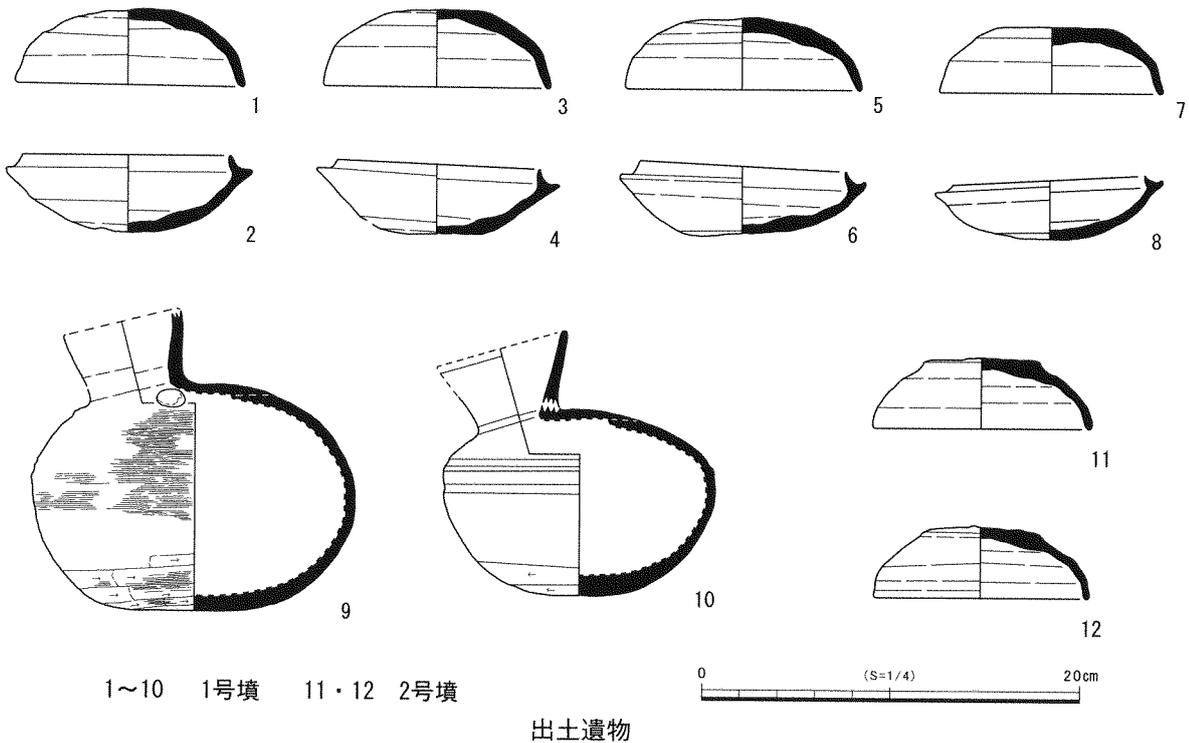
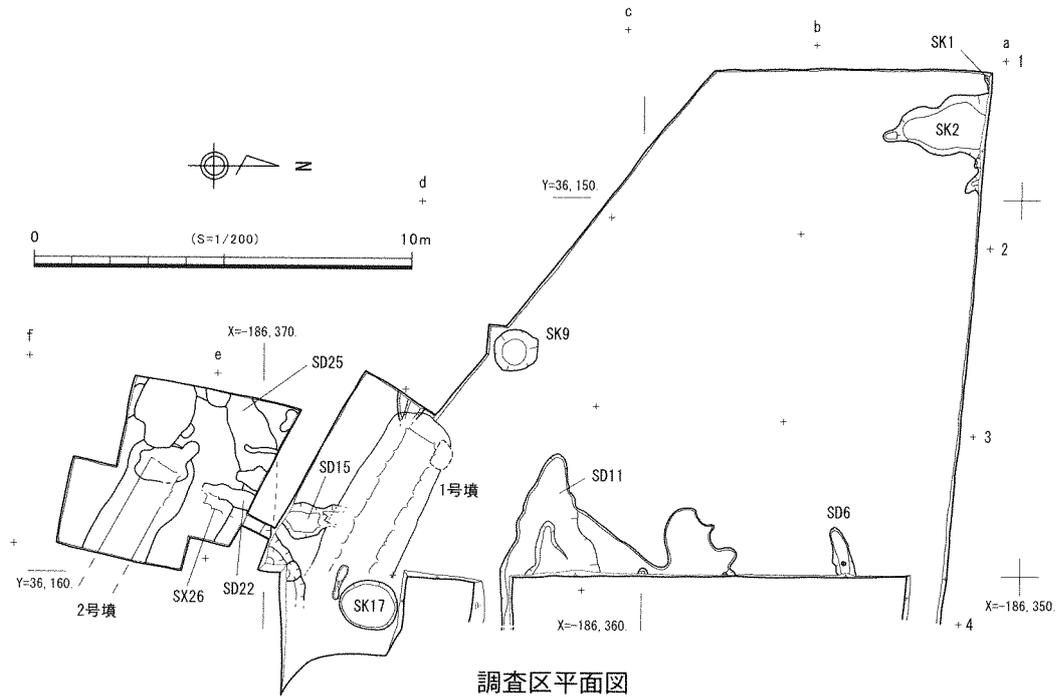
また1号墳入口と2号墳奥壁をつなぐ位置に南北方向に竪穴系の小石室（SX26）が確認できた。小石室は板状の石を長方形に合わせた小型の石室で北側は2号墳の周溝と考えられる溝（SD25）に壊されているが、幅40cm、長さ1.5mに復元できる。また床面には直径2cm前後の白色の円礫が敷かれていたものと思われる。出土遺物はない。

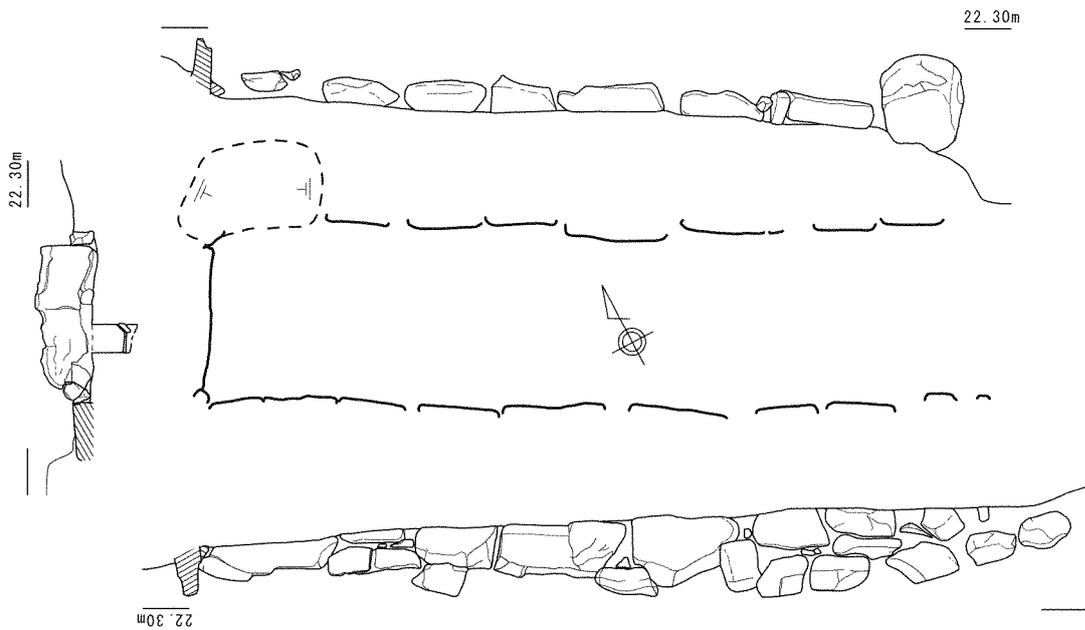


調査区位置図

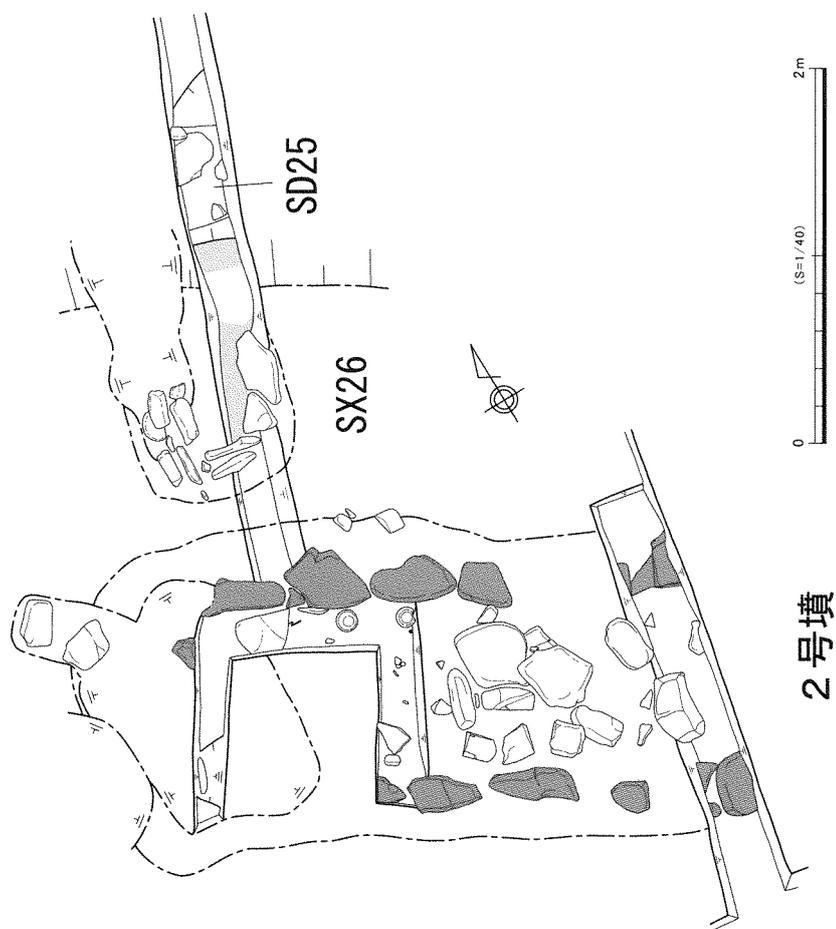
## 2 まとめ

本調査により、横穴式石室を持つ古墳を2基確認することができた。古墳の時期については、1号墳と小石室（SX26）が7世紀第1四半期頃と思われ、奥壁周辺から出土した須恵器坏（1～4）とその他の須恵器坏（5～8）とは調整技法にやや違いが認められることから、追葬があったものと想定される。2号墳については7世紀第2四半期頃になるものと思われる。（坂口）





1号墳



2号墳

石室ライン ● 礎敷き範囲

石室平面・立面図

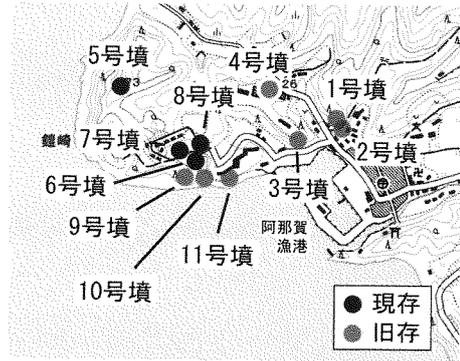
### 第3章 資料紹介

#### よらいざき 鎧崎古墳群出土遺物

鎧崎古墳群は淡路島の南西端、目前に鳴門海峡と徳島県を臨む阿那賀の海に突き出た丘陵上に広がる古墳群である。周辺には沖ノ島古墳群やしだまる古墳群が立地する。

明治43年、山で木株を掘り起こしていると、丸い石が多く現れた。土器も出土し、古墳であることがわかった。その後、京都大学の浜田耕作氏の指導で地元住民による発掘調査が行われた。当時は約30基の古墳があったと言われている。石室は丸くなった砂岩を使用した竪穴式石室で、小円墳であったと思われる。古墳は現在1～11号墳まで遺跡登録されているが、発掘調査時の図面や写真は所在不明であり、残念ながら遺物の出土地点などの情報は皆無である。遺物は当埋蔵文化財調査事務所に保管されている。

出土遺物はコンテナ4箱分あり、そのうち3箱が土器で全て須恵器である。図化可能な土器は56点である。出土した器種は、蓋坏・有蓋高坏・甗・短頸壺・提瓶・平瓶となる。蓋坏が最多で、大型（径17cm 4・33）・中型（径13～16cm 1～3・5～15・27～32・34～43）・小型（径9～12cm 16～26・44～47）と分類できる。4・33の内面天井・底部にはそれぞれ同心円文の工具痕



鎧崎古墳群位置図



出土須恵器

が確認でき、胎土や技法などよりセット関係にあると考えられる。最多の中型は蓋外面天井部や身外面底部にヘラ記号が施されているものが多い。ほとんどが×印だが、32は暗文の後に線刻されている。19はヘラ記号と言えるか疑問であるが、ヘラによる小さな刺突状線が目視できる。平瓶54は円盤充填技法である。提瓶56は鉤状の把手が付き、円盤充填技法である。

57～64は耳環である。鉄芯銅張金メッキである。いずれの耳環もやや横長で扁平、断面は楕円形である。62・63は鉄芯部分で64は62に付く銅張部分である。

鉄製品は鉄刀と思われる破片が6点(65～70)、鉄剣が1点(71)、鉄鏃が9点(72～80)出土している。保存処理を行っていないため、詳細な観察はできていない。71は鉄鏃とすればやや大型となるため、鉄剣とした。現段階での木質の痕跡は確認できなかった。72～76は鏃身が丸みを帯びるタイプ、77～80は鏃身が直線的で関が方形に突起するタイプの鉄鏃である。いずれも木質は確認できていない。

棒状石製品(81・82)は2本出土し、結晶片岩製である。両端はどちらも磨耗しており、82は著しい。81は側面に擦痕状の傷がある。製作痕か使用痕かは不明である。

水晶製の切子玉(83～86)は断面が歪な六角形である。片方の孔が狭いことから片側穿孔と思われる。

87は碧玉製の管玉である。ガラス玉(88)は濃い紺色で側面に縦方向に3本の線が確認できる。写真図版には横方向からの拡大を掲載した。土玉は34個出土しており、そのうち6点(89～94)を記載した。外面黒色を呈している。

各遺物の出土古墳が不明のため系統だったことは述べることはできないが、本報告書が刊行されている沖ノ島古墳群と比較して鎧崎古墳群を述べたいと思う。

48のような古い遺物もあるが、鎧崎古墳群は基本的には6世紀後半(MT85・TK43・TK209)の範疇であり、これは沖ノ島・しだまる古墳群の築造期と重なる。蓋坏にヘラ記号が施されたものが10点あり、沖ノ島7号墳では坏身(中型)で2点出土している。大型と考えられる坏身が沖ノ島3号墳より出土しているが、3号墳は古墳群中最初に築造されており、4・33は3号墳と同時期と考えられる。沖ノ島で水晶製切小玉・勾玉・管玉が副葬されていたのは1・2号墳のみであり、両古墳は古墳群中最新の築造である(浦上2013)。鎧崎では勾玉は未確認であるが、共通して水晶製切子玉・碧玉製管玉が出土している。棒状石製品も沖ノ島と同質同形である。

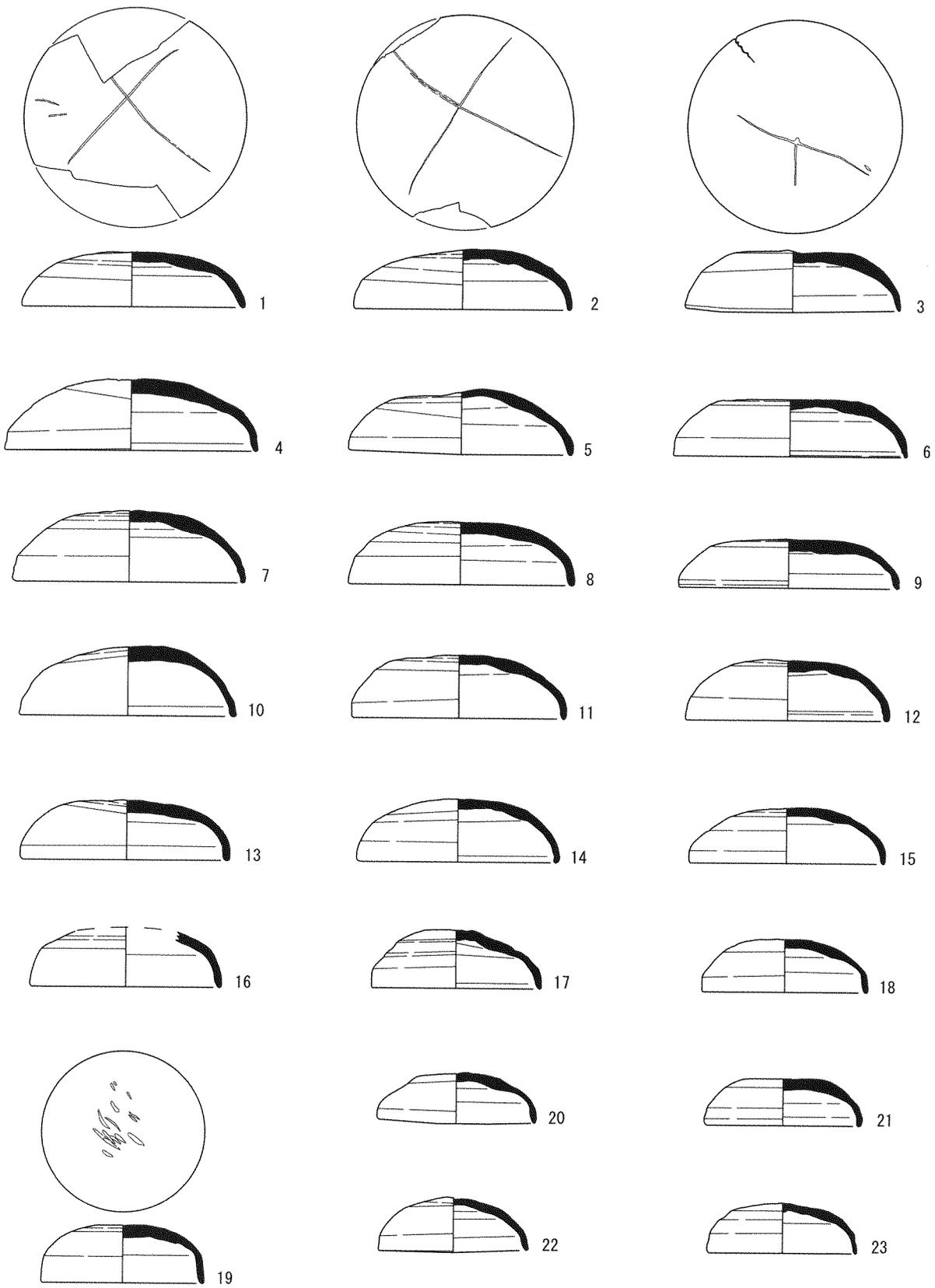
以上のように、鎧崎古墳群と沖ノ島古墳群の出土遺物は器種・状況ともに重なっており、同一グループの埋葬地帯であった。小さな島に古墳が築造された沖ノ島古墳群は、その特殊な立地から埋葬される人物はなんらかの選択がなされたことは想像に難くない。その選択から外れた人物が鎧崎古墳群やしだまる古墳群に埋葬されたと推測する。

また、棒状石製品は淡路島独自の遺物と考えられていたが、和歌山市西庄遺跡では5世紀代の遺物と共伴し、初現が紀伊であると近年解釈されている。対岸の徳島では出土は確認されていないが、淡路市畑田遺跡で確認され、明石市東野町遺跡では7世紀中葉の土器とともに出土した。棒状石製品の出土により淡路島南部から西部を通り、瀬戸内海でも重要な明石海峡対岸へという紀伊からの人の流れが想定される。(定松)

(参考文献)『淡路・沖ノ島古墳群発掘調査報告』1987 西淡町教育委員会

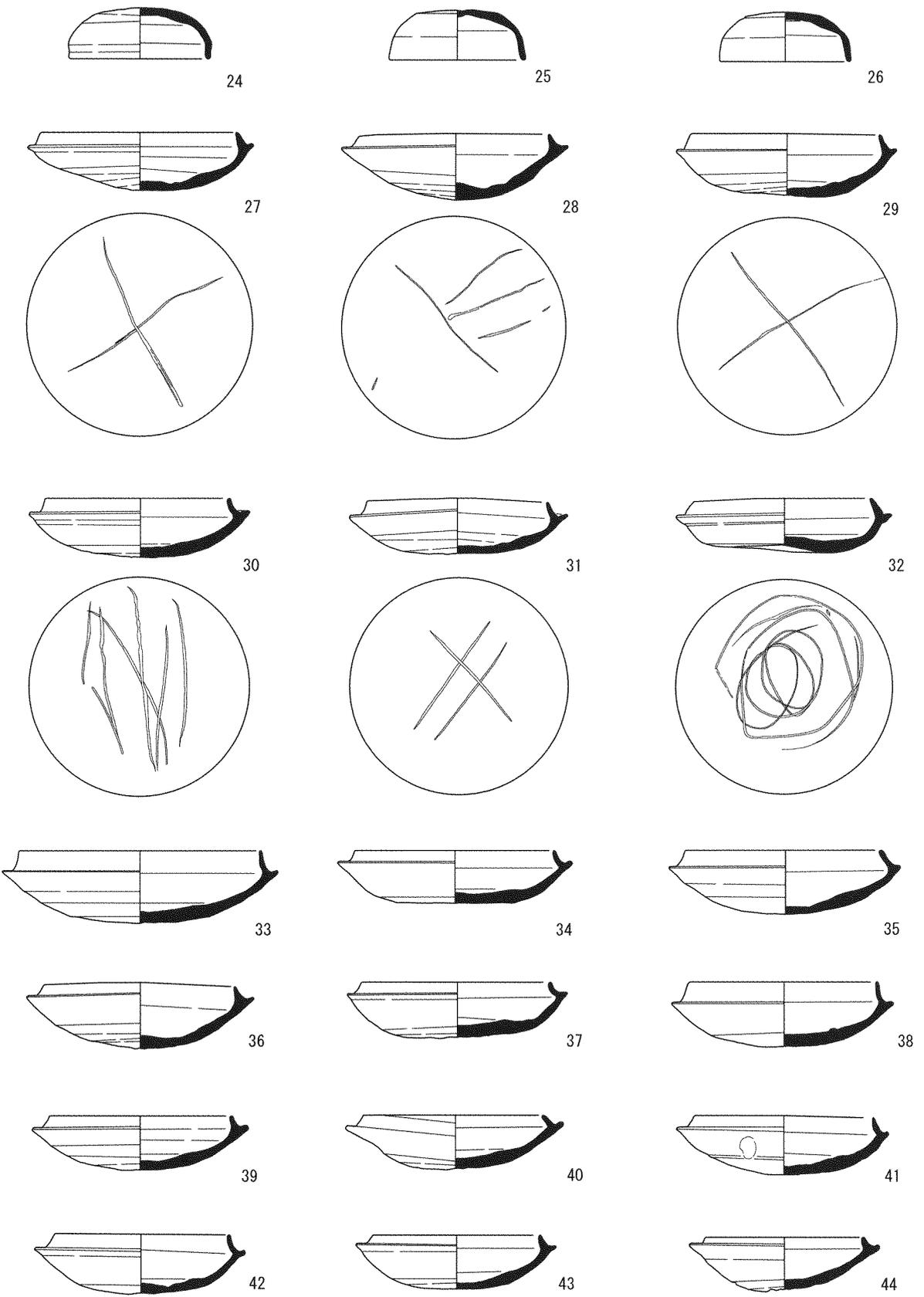
『淡路島の古墳時代』1993 洲本市立淡路文化史料館

浦上雅史「淡路島の海人の墓」『海の古墳を考えるⅢ』2013 海の古墳を考える会

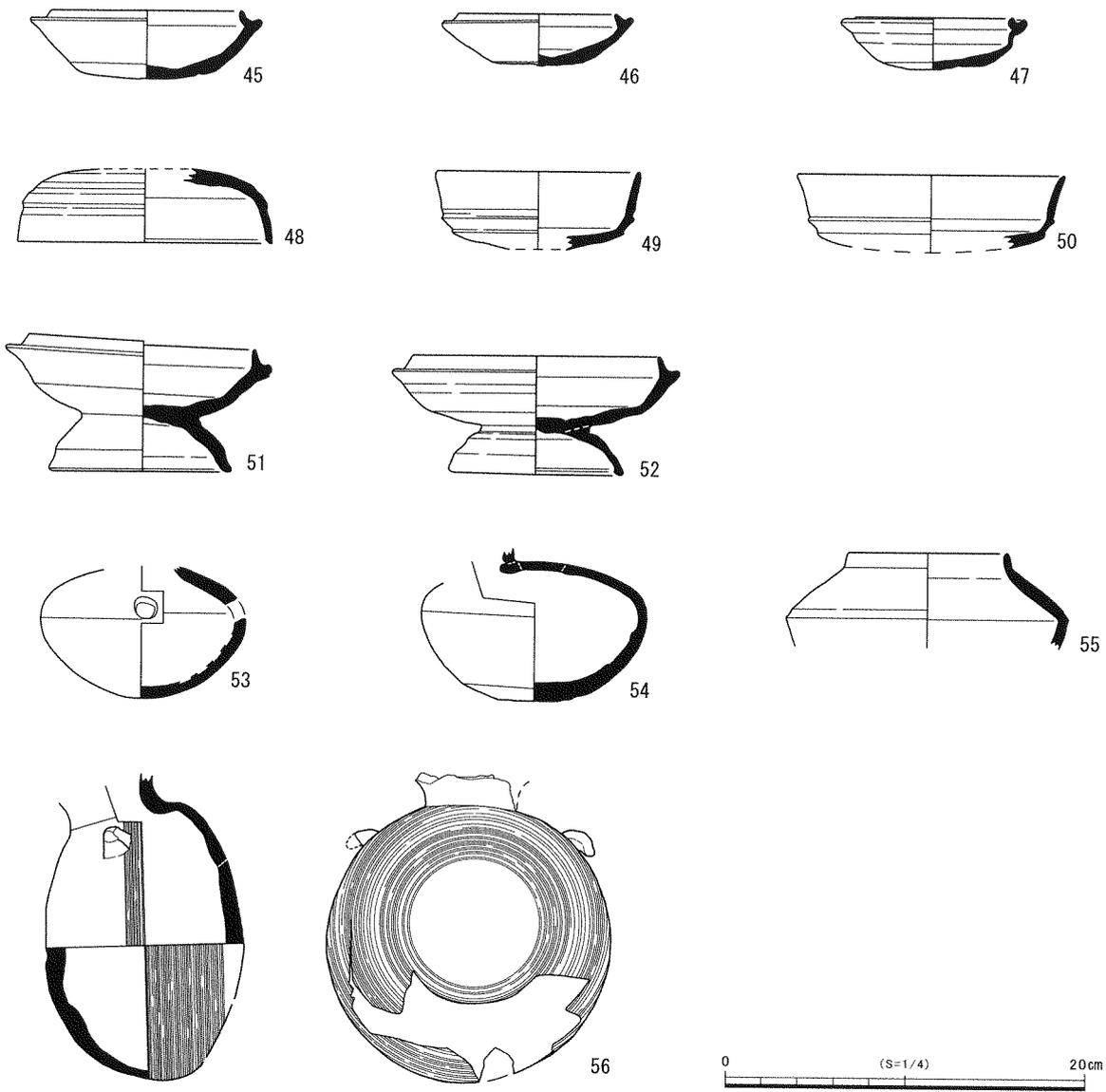


出土遺物 1

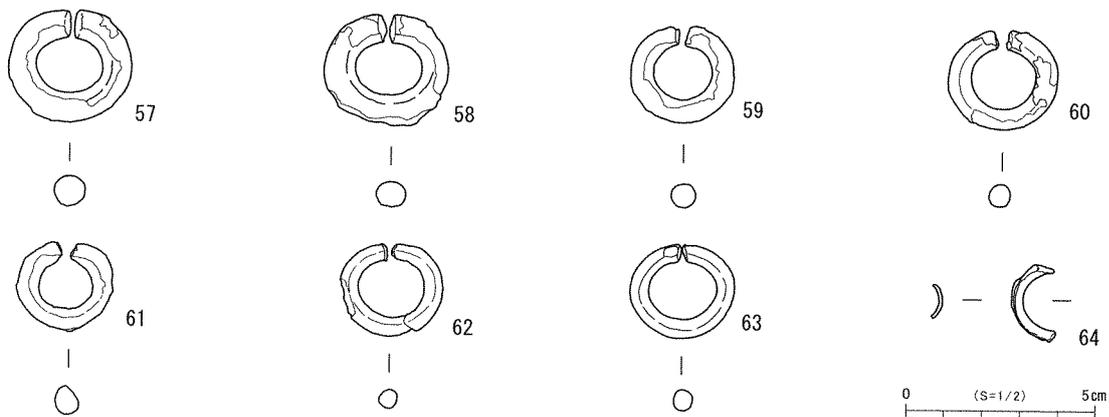
0 (S=1/4) 20cm



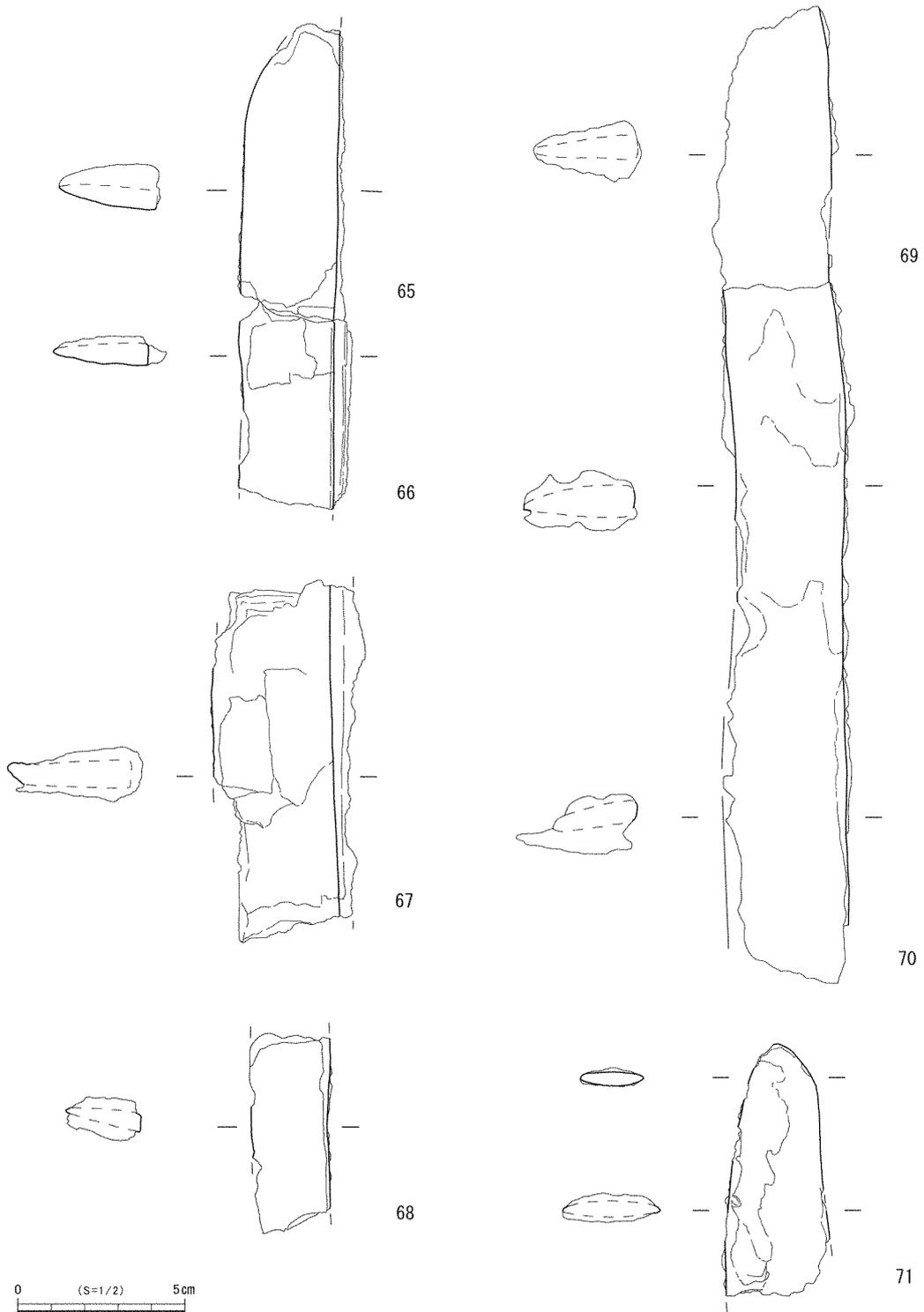
出土遺物 2



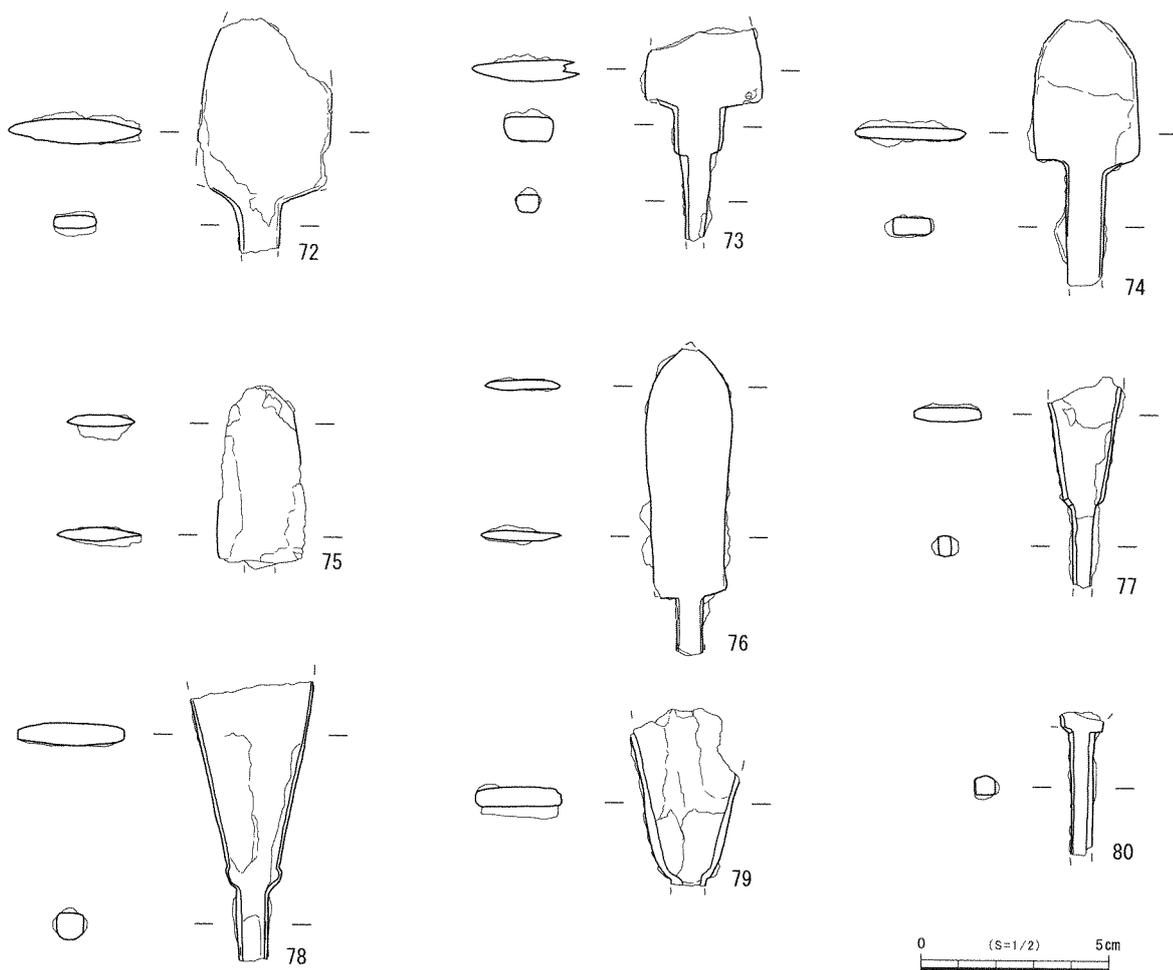
出土遺物 3



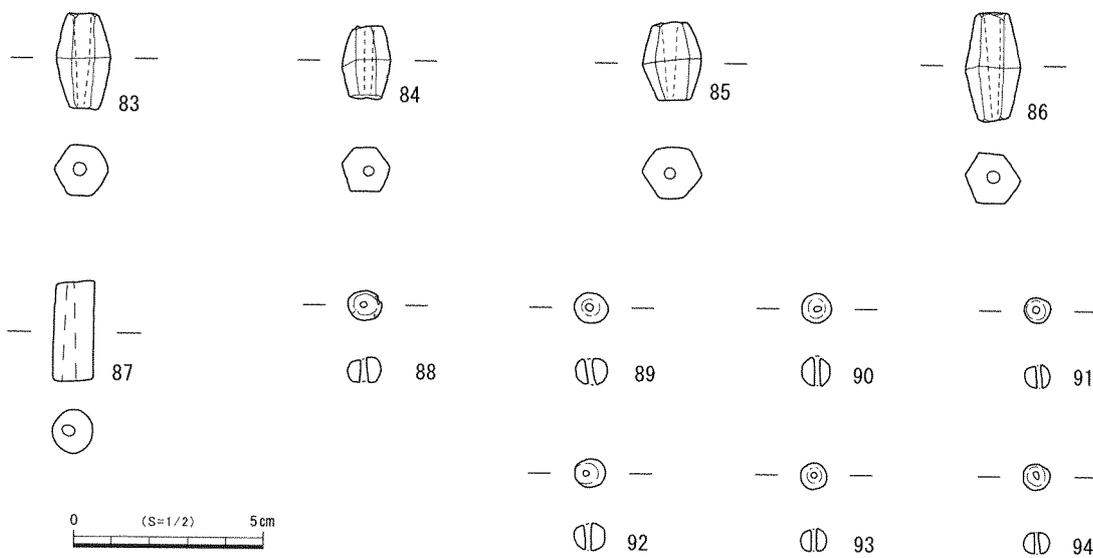
出土遺物 4



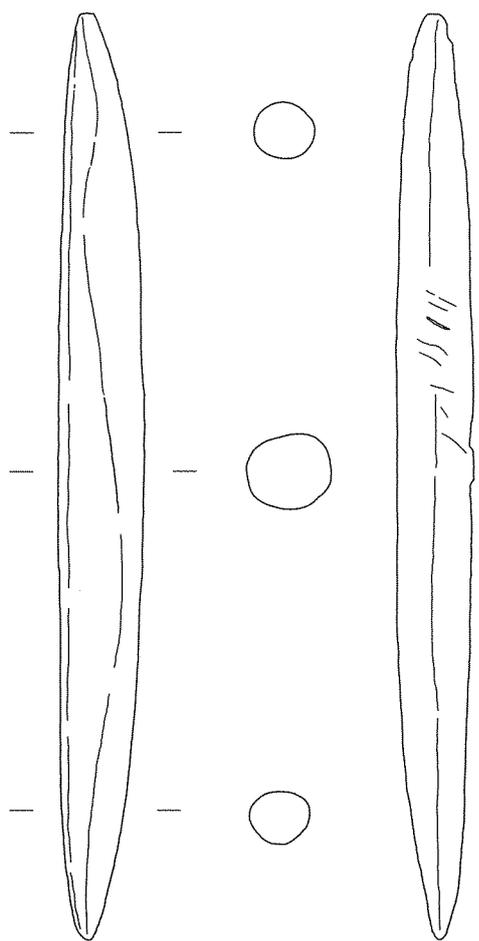
出土遺物 5



出土遺物 6

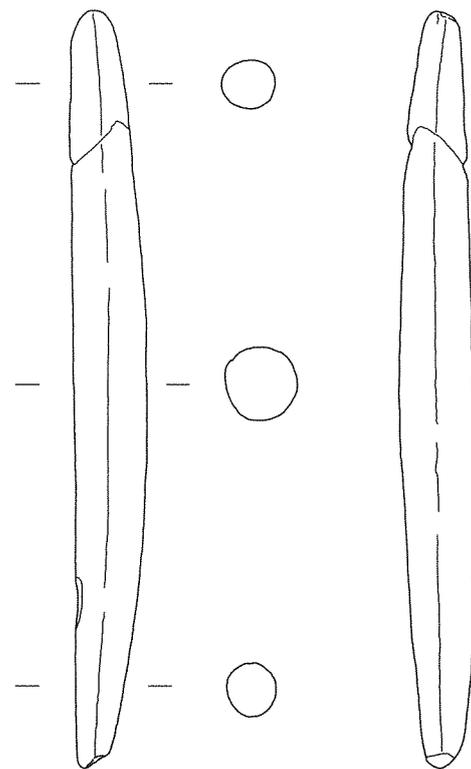


出土遺物 7



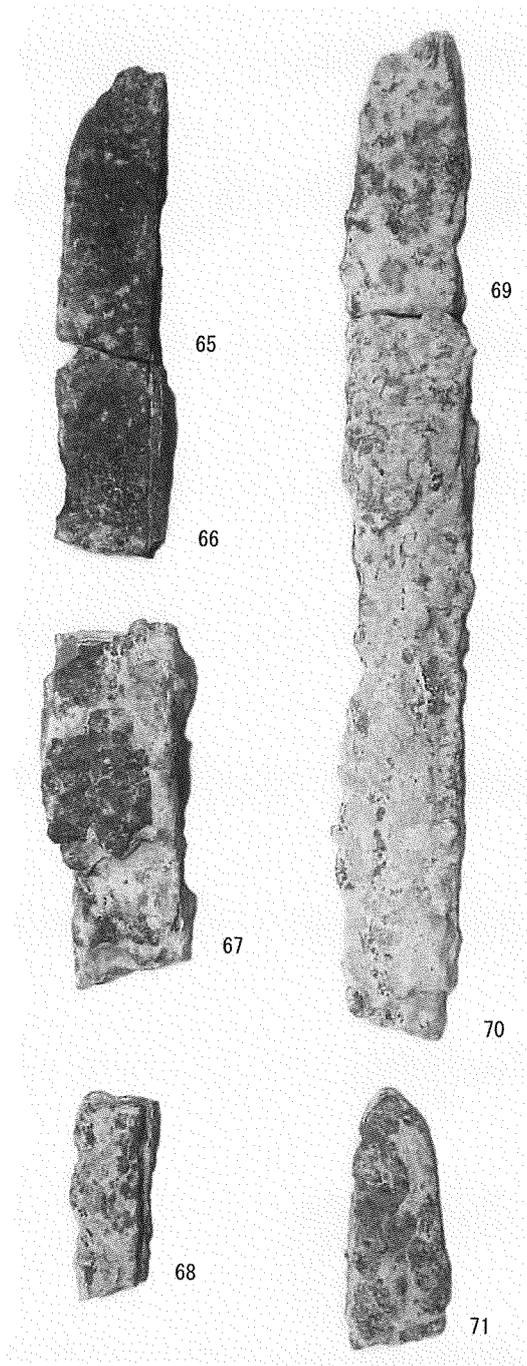
81

出土遺物 8

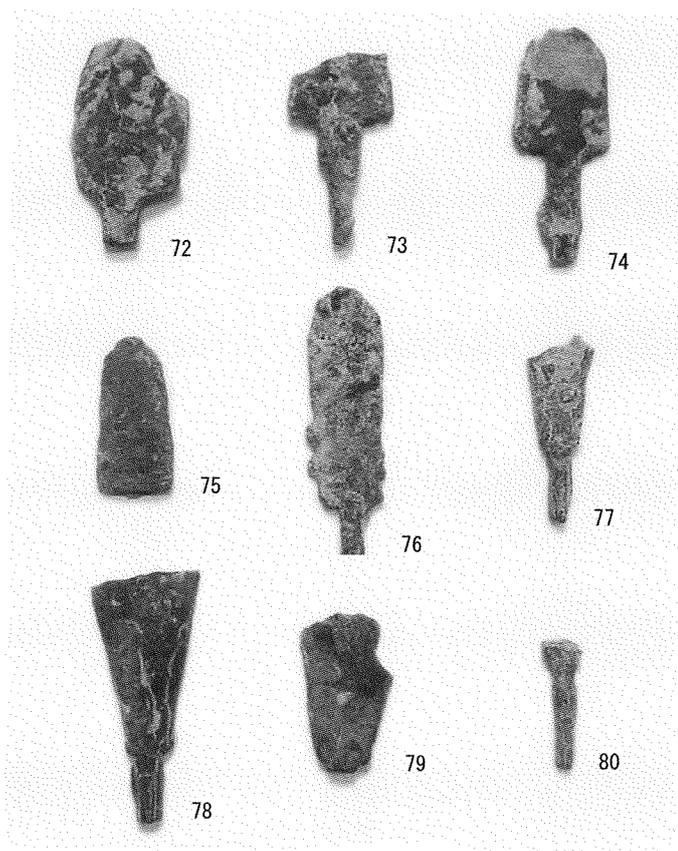


82

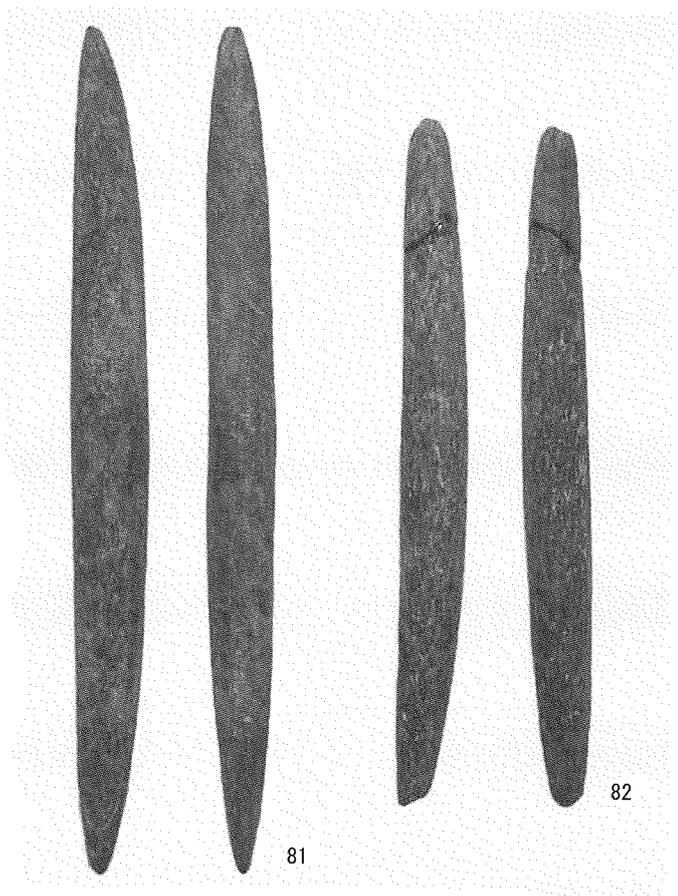
0 (S=1/2) 5cm



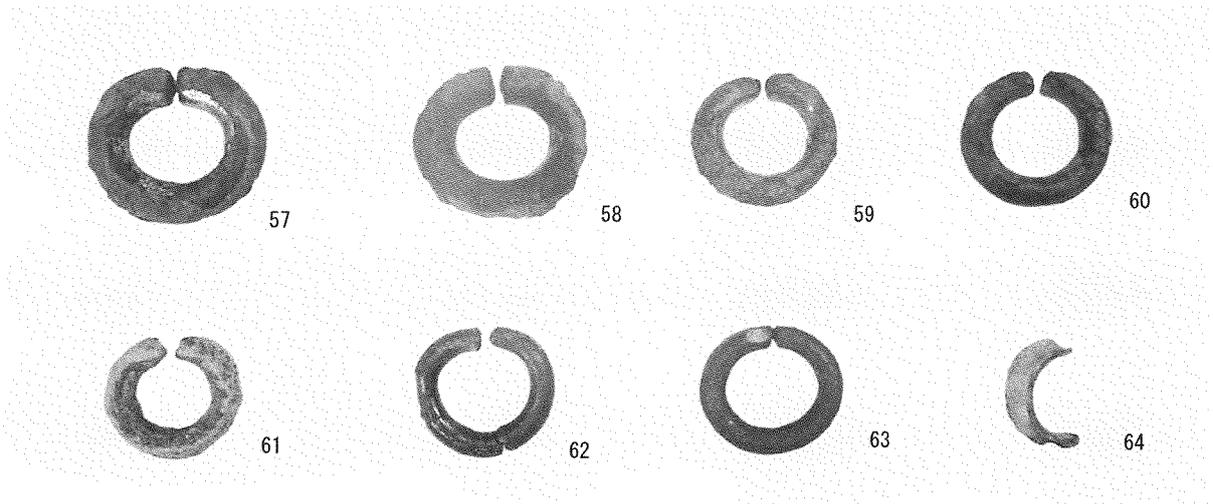
出土鉄刀・鉄剣



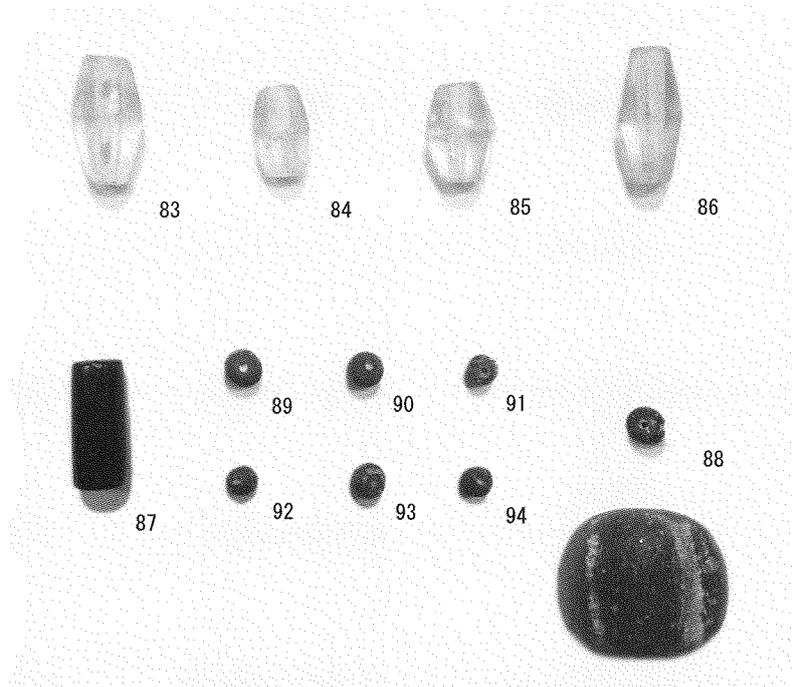
出土鉄鍬



出土棒状石製品



出土耳環



出土切子玉・管玉・ガラス玉・土玉

2014年3月31日発行

**南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅶ**  
2010年度 埋蔵文化財調査

発行 南あわじ市教育委員会

編集 南あわじ市埋蔵文化財調査事務所

〒656-0455 兵庫県南あわじ市神代国衙1100

TEL 0799-42-3849

印刷 真野印刷株式会社

〒656-0521 兵庫県南あわじ市八木立石51

TEL 0799-42-0008